昭和42年3月24日国東局特別
昭和40年3月8日第三種郵便物認可（5日、20日発行）

☆帝国主義国、植民地従属国、「労働者国家」
三ブロック階級闘争を
世界プロ独一世界共産主義の勝利へ！
共産主義者同盟（戦旗派）

戦旗

3月20日
5日、20日発行
第347号
編集発行人　鹿島　昇
一部100円
購読料10回1,200円（〒共）

戦旗社
品川郵便局私書箱6号
電話03（782）1830
振替　東京176133

春季攻勢の一大突破口に向け
3・30東拘実力糾弾闘争へ
全人民総決起を克ち取れ

全国の同志諸君／戦旗購読者諸君／七五年を戦略的反攻の飛躍に向けた一大正念場として、将に階級激突を引き出す決戦場として、はっきりと受けとめたわれ・プロ独派は、いまや大胆に戦線において突出した戦いの展開している。部落解放闘争においては、あの反革命差別者集団＝日共による連日の差別映画「橋のない川」上映を通した反部落・反部落解放同盟と共に実力決起、沖縄解放闘争においては、二・一ゼネ総決起、二月一九日海洋博参加国第一回代表者会議粉砕闘争を沖縄解放同盟と共に打ち抜き、あるいは立教学費闘争、東京交通反会実力闘争を、労、学の先頭に立ち切り開い抜いている。

わが蜂起・プロ独派の闘いは、帝国主義勢力圧民族の自覚の上に立ち、徹底して被抑圧民族・人民と連帯して将に血債にかけ闘うとう、すべて「組織された暴力」とプロレタリア国際主義」の立場を継承し、発展するものとして闘い抜かねばならないのだ。

この帝国主義を被抑圧民族、人民とともに打倒し抜くという闘いは、そうであるがゆえに一切の社会排外主義者、差別者集団との同時的闘いを不可避とするのであり、今日日帝のボナパルティズムの転換、侵略反革命の本格化、そして戦争を準備しているとき、将にこの事は全人民の階級的責務として、はっきりと受けとめ切らねばならない。

朝鮮人民の民族解放・南北革命統一に敵対するのか、沖縄人民の沖縄解放闘争に敵対するのか、部落大衆の部落解放闘争に敵対するのか、それとも徹底して連帯し闘うのかは日本革命＝世界革命上の根本問題なのである。

社・共、カクマルは言うに及ばず、沖縄闘争終焉をかかげ、わが革命派の闘いを被抑圧民族、人民の闘いに逆行するダメな闘いなどと、度し難い反革命に落ちぶれ、四トロの如き階級闘争とは縁もゆかりもない部分と野合した自由脱落分子との闘いも又不可避としてあるのである。

いまこそ党と革命勢力の一切をかけて、体制的危機にゆらぐ帝国主義を、社会排外主義者もろとも、歴史の彼方にふき飛ばさねばならない。

反革命攻撃に抗し、帝国主義の断末魔の喘ぎに止どめをさせ！

ベトナムを始めとした植民地人民の総反攻の前にIMF・GATT体制・安保・NATO国際反革命同盟はメタメタに切りさかれ、一切の展望も見い出しえぬまま、IMF総会は破産し、また帝国主義の盟主である石油ドル・アラブ人民の闘いの前に危機におちいり、さらにはアフリカ植民地国の次々の独立、反共軍事独裁政権の危機と未曽有の危機に追いこめられた帝国主義諸列強は、今やなりふりかまわず市場再分割、国際反革命同盟の再編、国内反動攻勢＝ボナパルティズム権力への転換を強行せんと、戦争を挑発し、必死の延命をこころみんとしている。

しかし米帝にあっては、失業率は八%をこえ、崩壊寸前の危機に追いこめられたロン／ノル政権は、一切の援助がうちきられぬまま風前の灯と化し、民族完全解放に一歩手前まできたカンボジア情勢、サイゴンへ肉迫し進撃し続けるベトナムの革命勢力、戒厳令体制下にありながら敢然と闘い、朴政権支持五制の国民投票の本質を見抜き闘い、朴政権支持五制という、朴にとって根底的危機をつきつけた朝鮮人民の闘い、そしてこの闘いは再々度の投獄、拷問を恐れることなく闘争宣言を発している又、フィリピン、マルコス政権の戒厳令、戒厳令体制をものともせず闘い抜くフィリピン人民の闘いと、帝国主義の植民地支配の打倒を目指す闘いは、全世界をおおい燃えさかっているのだ。

かかる植民地・従属国支配体制の危機、経済的、体制的危機に直面した帝国主義者は、一方において反動攻撃ファシスト育成をしつつ、反革命同盟の再編、戦争体制発をくりかえしている。

イタリア、ドイツにおけるファシストの抬頭、イギリス保守党におけるサッチャーを頭目とした極右、侵略反革命政策遂行者の支配、アメリカにおける日常的監視体制の発表、日本における諸反動立法体制度化、天皇の政治過程への登場、差別・分断支配、自衛隊の日本軍への転換、内乱鎮圧軍隊としての登場によるボナパルティズム権力への転換としてそれは実現されんとし、又、米帝のベトナム・カンボジアへの軍事介入宣言として、日帝にあっては「沖縄・朝鮮直結」論、「マラッカ海峡防衛」論として、あるいは西欧の中東への武器輸出戦争として次々と戦争挑発、戦争政策がはっきりと打ち出されてきたのだ。

いまや問題は鮮明である。危機にゆらぐ帝国主義の反動攻撃に屈し、他民族抑圧、戦争政策の尖兵になるのか、革命的内乱、蜂起・内戦＝世界革命戦争に勝利するのかをなのだ。

今号の内容

3・30東拘実力糾弾闘争に総決起せよ!!　二頁
2・2・1911紀元節粉砕・講演集会を貫徹……四頁
3・1労共闘総決起集会……五頁
東交・反合決戦の七日間……六頁
日向カクマルの女性の動員を粉砕せよ!……九頁
侵略反革命への女性の動員を粉砕せよ!……九頁
75年春期における革命的労働者の政治的任務　十一十四頁

日帝の延命を許さず 人民戦線の敵対を踏みくだけ

日帝国家権力のボナパルティズム的転換は、今や急速度の反動攻勢としてなされている。

その第一は天皇、皇族の政治過程への登場である。フォードの来日を契機に発表された今次の天皇の訪米、あるいは海洋博名誉会長としての皇太子の訪ソとして天皇制、天皇制イデオロギー攻撃が国民統合・沖縄の反革命的統合、差別・分断支配の環としてなされてきたのである。

第二に七二年沖縄「返還」―沖縄の反革命的統合の結着を七五年海洋博として打ち出してきているのである。

日帝国家権力はかかる攻撃と徹底しておこないながら同時に、労働者階級内部の差別・分断支配の確立をねらっている。

第三には日共を尖兵とし、いまや社会党をもまき込みつつ行なわれんとしている部落差別攻撃である。

第四には、日帝の侵略反革命の石川青年無期判決＝差別分断攻撃を頂点に、八鹿高校差別事件の反部落差別キャンペーン、日共の「橋のない川」上映、都の説明会をはじめとする諸差別分断攻撃としての攻撃がしかけられ、そして常に日共が尖兵となって敵対し、社会党、総評が「同和問題は小異」として部落切り捨て、全面的に転じ、その差別者ぶりを暴かれるにいたった。

第四は「クリーン三木」の名の下に幻想をふりまきつつ登場した三木政権が実は「闇両」内閣の大宣伝＝良い血筋、悪い血筋として権力内部の大抗争、同時に「公約」内容のなしくずし的変質強行、都知事候補にファシスト石原の起用として立ちあらわれてきており、第五に小西裁判判決を通じて暴露された自衛隊の日本軍＝侵略反革命＝他民族抑圧軍としての確立、治安出動軍としての確立と思想、ルティズム権力への転換を行なう朝鮮南半部傀儡民族を始めとした本格的なアジア侵略反革命を強行せんとしているのだ。

七二年沖縄の反革命的統合以降、日帝の急速度のアジア侵略反革命の決意、集会が次々と成功裡に沖縄の前線基地としての打ち固め、統合の完成を目指し、それを植杆とした政治犯釈放を、将にその本質をはっきりと見据え、更なる闘いの決意、集会が次々と成功裡に克ち取られ、三一独立蜂起、四・一九人民蜂起＝李承晩打倒の革命的伝統を、はっきりと明らかにしたのである。

かかる朝鮮人民の英雄的闘いを先頭に、日帝の植民地支配に抗し、闘い抜くアジア諸国人民の闘いは、昨年反日大決起を引きつぎながらフィリピン、タイ、インドネシア等まさにアジア全域をおおう反日、反天皇制反革命打倒の闘いとして打ち抜かれている。

将にそうであるがゆえにこそ沖縄の日、米軍事基地の徹底強化、戦術核兵器の投入、国民的合意等、安保体制を強化し、同時に沖縄人民の皇民化、統合の攻撃が一層強められているのだ。

被抑圧民族、人民と共に 全人民は総反攻に突き進め

米帝は国防省発表により、沖縄、「CTS」と基地と「貢」春製光」の島として築きあげんとするのが日帝の野望なのだ。

朝鮮直結論を明らかにし、沖縄が米帝東軍事戦略上の最重要環であることが言明され、沖縄米軍基地の半永久性が力説されたのである。又、日帝にあって死活をかけた七五年帝兵完成、を目指し、同時に四次防の早期完成をねらい、衛隊の日本軍教育を徹底化させるものである。

これを保障するものこそ日帝の反革命統合であり、差別・分断、起＝実力闘争を打ち抜き、キャピタ農民はパリティー方式・タダ働き制度粉砕に向け、「本土」へ陳情団が結成され、全島をあげての日本に対する闘いが断固として貫徹されている。

将に日本人民の階級的責務は、日米日帝打倒＝日本Pr独裁樹立／闘アジア人民と連帯し、日帝の侵略反革命を攻撃の国内階級激突戦に転化せよ！「上からの内乱」攻撃に対決し、革命的内乱＝蜂起・内戦を打ちとれ／沖縄解放＝日帝打倒／米帝放逐／朝鮮民地化攻撃阻止＝日帝打倒／南北革命統一＝日帝打倒／の戦略的総結集を高々とかかげ、全ての被抑圧民族、人民と共に社会排外主義と対決し、人民と共に全人民総決起の意味において今日の労戒厳令体制を突破しながら朴の全政権、朴体制の打ち固めを統により承認させんとした国民投票の日（この前は九割以上）として破産させ、同時に朴政権が歴史的崩壊政策として打ち出した政治犯釈放を、将にその本質をはっきりと見据え、更なる闘いの決意、集会が次々と成功裡に克ち取られ、三一独立蜂起、四・一九人民蜂起＝李承晩打倒の革命的伝統を、はっきりと明らかにしたのである。

かかる朝鮮人民の英雄的闘いを先頭に、日帝の植民地支配に抗し、闘い抜くアジア諸国人民の闘いは、昨年反日大決起を引きつぎながらフィリピン、タイ、インドネシア等まさにアジア全域をおおう反日、反天皇制反革命打倒の闘いとして打ち抜かれている。

将にそうであるがゆえにこそ沖縄の日、米軍事基地の徹底強化、戦術核兵器の投入、国民的合意等、安保体制を強化し、同時に沖縄人民の皇民化、統合の攻撃が一層強められているのだ。

しかし朝鮮人民の闘いは戒厳令、戒厳令体制を突破しながら朴の全政権、朴体制の打ち固めを統により承認させんとした国民投票の日（この前は九割以上）として破産させ、同時に朴政権が歴史的崩壊政策として打ち出した政治犯釈放を、将にその本質をはっきりと見据え、更なる闘いの決意、集会が次々と成功裡に克ち取られ、三一独立蜂起、四・一九人民蜂起＝李承晩打倒の革命的伝統を、はっきりと明らかにしたのである。

かかる朝鮮人民の英雄的闘いを先頭に、日帝の植民地支配に抗し、闘い抜くアジア諸国人民の闘いは、昨年反日大決起を引きつぎながらフィリピン、タイ、インドネシア等まさにアジア全域をおおう反日、反天皇制反革命打倒の闘いとして打ち抜かれている。

将にそうであるがゆえにこそ沖縄の日、米軍事基地の徹底強化、戦術核兵器の投入、国民的合意等、安保体制を強化し、同時に沖縄人民の皇民化、統合の攻撃が一層強められているのだ。

しかし朝鮮人民の闘いは戒厳令、戒厳令体制を突破しながら朴の全政権、朴体制の打ち固めを統により承認させんとした国民投票の日（この前は九割以上）として破産させ、同時に朴政権が歴史的崩壊政策として打ち出した政治犯釈放を、将にその本質をはっきりと見据え、更なる闘いの決意、集会が次々と成功裡に克ち取られ、三一独立蜂起、四・一九人民蜂起＝李承晩打倒の革命的伝統を、はっきりと明らかにしたのである。

かかる朝鮮人民の英雄的闘いを先頭に、日帝の植民地支配に抗し、闘い抜くアジア諸国人民の闘いは、昨年反日大決起を引きつぎながらフィリピン、タイ、インドネシア等まさにアジア全域をおおう反日、反天皇制反革命打倒の闘いとして打ち抜かれている。

将にそうであるがゆえにこそ沖縄の日、米軍事基地の徹底強化、戦術核兵器の投入、国民的合意等、安保体制を強化し、同時に沖縄人民の皇民化、統合の攻撃が一層強められているのだ。

働者人民の任務は、帝国主義の他民族抑圧、差別、分断支配を打ち砕き、帝国主義に屈服した社会排外主義との闘いを同時に実現することとして確定しなければならない。

狭山闘争の永続的・武装的発展を克ち取り部落完全解放に突き進め

社会排外主義者どもの帝国主義の側への急速度の転落、革命派への敵対は、最早とどまるところをしらず進行している。

昨年一〇・三一石川青年への有罪判決、無期判決＝差別死刑攻撃を頂点とした日帝の部落差別攻撃の前に、日共は「犯人として明白である人間を弁護したのは誤りであった」と、将に帝国主義の差別攻撃、権力のデッチあげに全面屈服し、公然と「石川＝黒、死刑は当然」と宣言し、今やファシストまがいの敵対分子に成り下り、いやそればかりか八鹿高校において日共教師を尖兵に、全国の日共、民青を動員しての部落差別攻撃として権力と一体となり敵対してきている。しかも、連日「赤旗」に反部落解放同盟キャンペーン「解同朝田一派＝暴力集団」等々をはりめぐらし、あの差別映画「橋のない川」を二月五日都体育館上映を頂点に、江戸川、品川等全都において権力、民青に守られつつ強行上映し、反部落キャンペーンをあおりたてているのだ。

社会党、総評においても日共のどうかつに完全屈服し「同和は小異」などと、なりふりかまわぬ敵対、差別者ぶりをあらわにし、日共と手をたずさえて窓口一本化に反対し、国民春闘＝資本家との協調、地方選に全てをおし流さんとしてきている。彼らの労働官僚ぶりは東京交通組でのATC、CTC導入＝機械労化攻撃、六千人大量首切りに労働者の不満を押えつつ賛成した事や、各地方選での日共との野合に端的に示されている。

いやこれ以上に狭山闘争に結集した多くの部分が、権力の差別攻撃、人民分断に屈服し、これを清算し、逃亡を始めた事に断固とした怒りを呼びさまさねばならない。日向派の政治的乗り移り主義等、七二年沖縄の反革命的統合を契機に生み出された沖縄闘争終焉論と同じような状況が、今一〇・三一差別死刑攻撃を前にして生み出されてきているのだ。

権力の差別攻撃を前にして今こそ全党・全人民が狭山を基軸とした部落解放闘争の一大攻勢に転じなければならないこの時期に社会排外主義に屈服し、敗北主義、清算主義、融和主義を全面化させ、労資協調―「国民春闘」にのめりこむ事など絶対に許してはならない。

かかる腐敗、堕落を極めた社、共、カクマル、そしてそれに屈服し、追随した中間主義、脱落分子を踏越え、差別糾弾・生活権奪還―部落解放！部落解放―日帝打倒の旗を守り抜き、部落解放闘争を反帝統一戦線の闘いの中核として打ち固め、狭山闘争を中核とした部落解放闘争に総決起していかねばならない任務を、わが蜂起・プロ独派は有しているのだ。

今春、狭山を頂点に部落、朝鮮、沖縄三里塚春闘に勝利せよ！

既に今春期における蜂起・プロ独派、全人民の任務は鮮明である。

第一は無実の部落青年石川一雄氏をなにがなんでも権力の手から奪還する事である。この事が為し切れなければ部落の解放はないという決意を断固として打ち固め、清算主義、敗北主義、融和主義を吹飛ばし、三・三〇東拘実力糾弾闘争に全人民は総結集していかねばならない。この闘争に狭山闘争の永続的、武装的発展の成否がかかっている事を胆に命じ、総力をふりしぼり、一〇・三一無期判決＝差別死刑攻撃を粉砕し、無実の部落青年石川一雄氏を実力奪還せよ！全ゆる融和主義、清算主義、敗北主義を粉砕し、狭山闘争の永続的武装的発展をかちとれ！反革命差別者集団日共、カクマルを徹底糾弾し部落解放―日帝打倒に進撃せよ！三・三〇東拘実力糾弾！石川青年実力奪還！の旗を高々とかかげ進撃していかなければならない。

そしてこの狭山闘争を頂点に権力の部落への総攻撃、人民分断に日常的支持連帯の闘いをおしすすめ、職場、地区、学園の各部落研を断固として防衛し、闘い抜き、同時に権力の走狗日共を始めとした差別者集団をふきとばさねばならないのだ。

第二の任務は朴の戒厳令、戒厳令体制をものともせず、植民地支配に断固とした闘いをいどんでいる朝鮮人民との強固な連帯を克ちとる事である。

三・一独立蜂起、四・一九人民蜂起の地平を断固として支持し、五～六月予定される日「韓」定期閣僚会議を頂点としたあらゆる反革命的策動を打ち抜き、南半部人民、在日朝鮮人民の闘いと連帯し抜き闘いをかちとらねばならないのだ。

第三の任務は七月二〇日開催予定の海洋博をたたきつぶすべく、沖縄本部現闘団を中軸に、沖縄・「本土」実行委をより強化し、同時に、「本土」にたたき出された沖縄人民の大和による沖縄差別に対する闘いを断固として支持し、権力の介入を許さず、共に闘い抜くことである。又、海洋博を通した大和による「買」売観光を絶対に阻止すべく、女性解放闘争の主軸として、キーセン「買」春観光阻止とともに女性を中軸に沖婦連と共に闘い、三・八国際婦人デー、三・二三沖縄婦人問題シンポジウムにおいて全人民的課題として闘い抜く事である。

将にこの沖縄解放闘争において日向一派中央指導部Sより公然と言いはなたれた沖縄闘争終焉論に端的に表わされる日向一派の敵対がわれわれに対する敵対としても同時に行なわれている事をはっきりと見据え、この敵対をはねのけ沖縄闘争の戦略的勝利をかちとらねばならない。

第四の任務は侵略反革命の拠点三里塚空港建設が、総裁大塚を先頭に第二期工区の強制収用―撤去用道路建設として急速に煮つまりつつある三里塚現地闘争を、現闘団の強化を実現しつつ反対同盟とともに実力阻止し抜く事である。

五名の不当逮捕者を出しつつ実力闘争として貫徹された、そして是が非でも実現しなければならないこの課題にいつ、いかなる事態にも対処しうる体制をひき、一次、二次決戦の地平を断固ひきつぎ闘い抜かねばならない。

第五の任務は、社、共、民同による労資協調型春闘路線、国民春闘方式に抗し、革命派の圧倒的領導による春闘に勝利する事である。

三・一独立蜂起連帯、春闘勝利総決起集会の地平を更におし進め、東交反合実力決戦の勝利を東交民同の組合統制をはねのけ、かちとり、処分撤回共闘を軸にした革命派領導下の春闘を満天下にさし示し切り、全労働者階級がこの闘争を手本に、そして全春闘の情勢をわれわれが領導する事である。労資協調を前提とした物とり主義、ボス交路線と徹底対決し、あるいは民同のどうかつに屈した革命派からの脱落分子と対決し、春闘の実力的発展を、首切り、レッドパージを恐れる事なく蜂起・プロ独派の労働者は、官公労、民間を貫き最後まで闘う使命をりっぱにはたさねばならないのだ。

かかる任務の完全まっとうは、今日の階級情勢の基本的性格―社、共、カクマルの帝国主義の側への完全転落と敵対、日向、四トロを軸とした人民戦線の尻尾化、敵対の尖兵化―を踏まえるならば、わが蜂起・プロ独派の思想性、組織性の同時的徹底強化の要請が不可避なのであり、党と革命勢力はこれにこたえ切り、あらゆる敵対をはねのけ、春闘大攻勢の爆発的勝利を全人民のものとしていかねばならない。

全人民はこの五つの任務、課題にこたえ切り、最後の勝利に向け闘い抜け！

闘争スケジュール

3月23日　沖縄女性問題シンポジウム
主催■沖婦連　六時品川文化会館

3月30日　石川青年実力奪還―東拘包囲糾弾闘争
主催■3・30実行委員会　十二時東綾瀬公園

2・11紀元節粉砕講演集会を貫徹
天皇訪米阻止へ第一弾

全ての闘う沖縄人のみなさん！

労働者人民のみなさん！

二・一一紀元節粉砕、皇太子訪沖阻止、天皇訪米阻止講演集会を、海洋博粉砕―沖縄解放に向けて闘い抜いている沖解同と連帯して克ち取つたことを報告したい。

当日、蜂起―プロ独派に結集する戦闘的労働者、学生、高校生百五〇名は、南部労政会館において、四時より総決起集会を克ち取つた。

基調提起に立つた日本反帝戦線の同志は、現下の日本帝国主義の攻撃が、朝鮮植民地化をテコとしたアジア侵略反革命攻撃の本格的強権的遂行としてあり、その実現に向けた、侵略反革命体制の打ち固めを、沖縄の反革命的統合を要に一挙的に推し進めようとしていること。七二年「返還」以降の攻撃の最後的完遂がアジア侵略反革命戦略の一大拠点としての沖縄の反革命的打ち固めにあり、日帝は、反共民族排外主義への労働者人民の動員を天皇制―天皇制イデオロギー攻撃の下に、侵略反革命＝朝鮮植民地化を遂行していること。

かかる日帝の攻撃の中にあつて、「海洋博」こそは、式典への天皇―皇族の出席をメルクマールに、「本土」人民の大和排外主義への動員、沖縄人民の屈服を取りつけ、反共民族排外主義へと収約せんとする一大攻撃であることを明らかにし、又社共を先頭とする「本土」人民の大和排外主義、反共民族排外主義への転落が雪崩を打つて進行している中で、国際主義の内実を賭けて蜂プロ派の牽引の下に民族排外主義、中間諸潮流を粉砕して闘い抜くことを提起し、結集した全員の意志統一を克ち取つた。

次いで、六時半からの沖解同呼びかけによる、講演集会に、結集した。沖解同からの基調提起を受けて、徳田正次氏が講演し「天皇制こそが、日本帝国主義の支配の環であり、天皇制と対決するのか否かが、最も強く要求されている。天皇制と対決できない政党は、一切駄目だ」と強調した。結集した二五〇名の沖縄人、労働者、学生、高校生は、徳田さんのかかる提起を、はつきりと受けとめ、七五年海洋博を通してかけられている、天皇、皇族の訪沖が、明らかに、沖縄の天皇制―天皇制イデオロギーの下への繰り込みを画策したものであること。そして、この日帝の海洋博攻撃との対決を七二年沖縄「返還」以降放棄し、逃亡を開始した諸党派の脱落を許さず闘い抜くことを、圧倒的な、拍手によつて確認した。

次いで、「沖縄差別を許さず沖縄人の連帯を克ち取る会」の沖縄青年から、「本土」における沖縄人に対する苛酷な差別の実態を暴露し、裁判闘争を断固として闘い抜くという力強い決意が表明された。

まさしく日帝の海洋博攻撃は、沖縄の基地強化を前提として、「基地とCTSコンビナートと『買春』観光」の島として打ち固めんとするものであり、沖縄の農漁民の生活を根底から破壊し、流民化を強要し、「海洋性進取性」とあおりたてる事をもつて沖縄人を日帝の侵略反革命の尖兵とせんとするものである。

我々は、かかる反革命的野望をはつきりと見抜き、日帝の侵略反革命―海洋博攻撃を、全力量をかけて粉砕しなければならない。

高叛共闘　独自闘争貫徹

すべての闘う高校生諸君！

われわれ高叛共闘は、二・一一紀元節粉砕高校生総決起集会を四トロ―日向一派等人民戦線派の[illegible]落を尻目に唯一、二・一一実行委の下にかちとり革命的高校生運動の潮流的創出へ向け第一歩をしるした。

当日、三河台公園に結集した全都の闘う高校生百名の隊列は、二・一一紀元節粉砕、教育の帝国主義的再編粉砕、革命的高校生運動の創出、を高らかに宣言し、戦闘的デモを貫徹したのである。

2・9「橋のない川」上映に痛打
日共の敵対許さず前進を刻印
―東部―

全国の闘う部落大衆の皆さん。労働者、学生の皆さん。日共の差別映画「橋のない川」上映を糾弾する闘いが二月九日都東部小岩に於いて部落解放同盟墨田支部青年部とその呼びかけによつて決起した百余名の労働者、学生、高校生によつて闘い抜かれた事を報告したい。

反革命的差別者集団＝日共はこの間部落解放同盟に対する差別敵対を増々強化している。

その差別キャンペーンは部落差別を拡大する為にのみ行なわれ、八鹿高校に於ける許すべからざる差別行為としてその差別者としての本質を明らかにしているのである。とりわけあの一月十一日付の「赤旗」に於ける「一般刑事責任と民主的救援運動」という差別論文の中で「わが党中央は狭山事件について無実のえん罪と規定した事はなく」と明らかにし「殺人、強姦等の凶悪犯罪は近代社会では許されない」したがつて「民主的救援運動はかかる凶悪犯人を守る必要はなく」「むしろ国民の生命を守る為にはかかる凶悪犯罪と闘う」と言うものであり、石川氏を死刑にする事が日共の闘いであると公言しているのである。

墨田支部青年部の日共に対する糾弾の呼びかけに応えた労働者、学生、高校生百余名は、この差別映画「橋のない川」上映を許さないという決意の下に八日に於ける小岩駅頭の情宣を貫徹し、九日三時から小岩駅頭を制圧したのである。

駅頭で多くの市民が見守る中、墨田支部青年部の主催の下に集会が行なわれていつた。

まず墨田支部青年部より「日共の差別映画『橋のない川』を糾弾し、差別キャンペーンを粉砕して闘い抜く」「労働者、学生との共闘を強化して闘う」という力強いアピールを受けた後、結集した団体からの発言にうつり、まず東活の労働者は「日共の差別キャンペーンを解放同盟の闘いの支持連帯を強化して粉砕して闘う。そして狭山闘争の発展を十・三一判決を許した事の自己批判に踏まえて三・三〇東拘実力糾弾闘争として設定し石川氏実力奪還に向けた闘いを闘い抜く」という決意を明らかにし又都職、東交の労働者よりの発言を受け集会を圧倒的にかちとつた。

その後墨田支部青年部・支援の労働者は強固なスクラムの下にデモを開始したのである。しかし許すべからざる事に隊列が上映会場に向かわんとするや否や制服・私服の機動隊が一挙的に暴行を開始したのである。隊列はこの弾圧をものともせず圧倒的なデモを貫徹し、上映を大破産させた。更にその会場を放水車を始めとして機動隊が固めるという、恐るべき権力と日共の癒着を明らかにしたのである。

デモの後、総括集会において「解放同盟と労働者の地区に於ける共闘を強化してゆく事」を確認して全ての闘争を終えたのである。

講演する徳田正次氏

19出展参加国代表者会議粉砕に決起
2・海洋博粉砕へ第一波・外務省に抗議デモ

二月一九、二〇日の両日、日帝が秘密裡にもくろんだ「第一回海洋博出展参加国代表会議」に対して、沖縄「本土」を貫く闘いが炸裂した。この闘いは、海洋博開催の中で極めて重要な位置を持つ闘いであった。日帝は米・ソ以外の最大の出展参加国の代表を集め、一九日に東京において第一回目の会議を行い、二〇日には、本部現地の視察を行おうとしたのである。実はこの会議は、出席国も開催場所も一切明かにされないまま、秘密裡に行われんとしたのである。海洋博開催のために絶対に行わねばならないこの国際会議が、公然と行うことができないという事態こそ、日帝の沖縄支配が危機を深めていることの動かし難い証拠であり、海洋博開催の前進に対する重大な打撃となった。沖縄「本土」実行委員会は、一九日、第一回出展参加国代表会議粉砕闘争を終日にわたって闘い抜いた。早朝、日比谷公園に結集した外務省抗議団は、参加国代表会議粉砕！皇太子訪沖阻止！海洋博粉砕！のプラカード、横断幕をかかげて外務省に向かった。国家権力はこの闘いにあわてふためき、外務省正門にさしかかった抗議団のデモに対して、実に大量の私服警官、機動隊が正門内から飛び出し襲いかかった。抗議団はこのすさまじい弾圧をはねのけ、断乎たるシュプレヒコールを連呼し、闘いを貫徹した。そしてこの早朝闘争に引き続き、都内における圧倒的な情宣が行われた。

更に、午後六時三〇分から沖縄「本土」実行委主催の集会が百名を越す労働者、学生の結集をもってかちとられた。この集会は芝公園二号地において、国家権力の激しい弾圧をはねのけ実現された、「海洋博決戦」勝利の固い志に満ちた力強いものとなった。とりわけ、本部現地より代表して沖縄解放同盟の宮城氏が、「皇太子訪沖弾劾！大和人の沖縄占領粉砕！反日暴動に勝利せよ！」という鮮明な方針を、現闘活動のたくましい成果と共に明かにされるや、参加者の魂に訴えかけ、沖縄青年連絡会議から大和人の「買」糞人民に対する歴史的血債にかけて粉砕すべく闘い抜かんとの、一斉に会場全体が熱気に包まれた。

二月二七日、東京地裁刑事二六部鉛田裁判長は、佐藤首相に懲役二年六月執行猶予五年、武藤君に一年六月同四年、佐藤さん二年同四年、他化成家と一体となった差別判決なのである。

まさに、裁判所―検察庁は、一事件として一連の事態処理化を目論み、沖縄人民の意志を踏みにじってきたのである。

5・13統一渡告団

（略）

26グループに判決
5・13戦士への報復重刑攻撃許すな！

予防反革命攻撃である。更にまた、わが統一派告団は、かかる闘いをもってかちとられた。この集会は、二時間武装解除闘争の歴史的正当性を体現せんとする帝国主義的野蛮な占領支配の一翼を担いきるものとして、はっきりと位置づけ、最後まで闘い抜く決意である。

すべてのみなさんの、控訴審闘争への支援と圧倒的勝利をカンパの要請とともに訴えたいと思います。

皇太子上陸阻止 沖縄紀元節粉砕へ討論集会貫徹

二・五TOT沖縄県民集会への「金武湾を守る会」とともに闘い抜き、引き続き二・一一闘争を貫徹した。一・四海洋博協会長夫人の「ひめゆりの塔」訪問阻止闘争、二月から治安弾圧体制を強化しており、また、名護に精神病院の建設を予定していることが明らかにされた。

我々は、精神障害者差別までも含んだ形での反対運動弾圧に抗しきる力量をつくりあげることは緊急の任務であり、権力の策動を粉砕する反クサバンベーションを本部―沖縄一帯に押し広げねばならない。

海洋博を中心に進む日帝の侵略攻撃を粉砕しよう。沖縄海洋開発計画粉砕！天皇・皇太子の沖縄上陸阻止！沖縄解放同盟の闘いを勝利的に闘いぬこう！

全国の闘う労働者人民、学生の皆さん！

「三・一朝鮮独立蜂起五六周年、結集した反朴・反「国民投票」闘争、春闘勝利労共闘集会」は品川文化会館において、労共闘を先頭とする軍事独裁政権の危機を満天下に暴露した「トンネル事件」ものデッチ上げ、北朝鮮艦艇に対する攻撃に自然発生的に呼応する形で、七五春闘の爆発的な反攻の思想的貫き、労働者の武装を党も取り戻し、権力闘争を構築し抜く能力を確立せよ！」として労共闘の革命的伝統に支えられ朝鮮に対する南北統一の運動の任務が提起された。集会はこの基調を圧倒的な拍手で確認していったのである。

水野委議長、総反攻を宣言

集会の冒頭、北部朝鮮史研究会の代表として登壇した朴は、「国民投票」をめぐる民族的朝鮮南半部人民の総力を結集した反朴・反「国民投票」闘争の前に、その「成信」を完全に失墜させられたのである。朴反共体制の危機を満天下に暴露した。「トンネル事件」ものデッチ上げ、北朝鮮艦艇に対する攻撃に示されるごとく、朴政権の南北統一の運動の任務が提起された。集会はこの基調を圧倒的な拍手で確認していったのである。

東交労働者より反合決戦の決意

この提起を受けて戦略的反攻戦の任務を最前線で闘い抜く三里塚現闘、「沖縄現闘の報告がなされた。二月二〇日から本格的に開始された敵攻撃に対する倉庫封鎖闘争を闘い抜く三里塚現闘、社共カクマルを中心とする沖縄解放闘争の清算派と闘い、CTS労働者を通じての沖縄現地農漁民との連帯を闘い抜く三里塚現闘、この両者の発言は戦略的反攻戦の基礎作業がその前線において、つきり鮮明にされたのである。

次いで東交共闘の代表として登壇した自治体の中にあって六〇年代を通じた自治体闘争の中で、反革命構造に対決した自治体労働者の闘いの歴史を明らかにし、第二次再建合理化との全面対決を主軸に据えた闘いを貫徹することを確認した。

現在、高松宮、秩父宮の医療施設閉鎖という形で着々とすすめられている天皇・皇太子の沖縄上陸を、たとえ、「植物学者」のベールをおかぶってでも絶対阻止する決意を満場で確認した。

我々は、つき進む日帝の天皇制イデオロギーを媒介とした沖縄の反革命的統合、アジア侵略反革命攻撃に対し、戦犯天皇とその一族、皇太子を最後まで糾弾し、若夏国体、植樹祭を上回る阻止闘争を貫いて闘いぬねばならない。

更に集会の中で、若夏国体（千葉）・大阪万博の際みられた権力の予防反革命的弾圧に対する例があげられた。これは、戒厳令体制はもちろん、権力の末端組織まで動員しての、「秩序を乱そうキャンペーン」「障害狩り」等であり、それを装った反対勢力の弾圧である。現に、沖縄「県」警は、二月から治安弾圧体制を強化しており、また、名護に精神病院の建設を予定していることが明らかにされた。

我々は、精神障害者差別までも含んだ形での反対運動弾圧に抗しきる力量をつくりあげることは緊急の任務であり、権力の策動を粉砕する反クサバンベーションを本部―沖縄一帯に押し広げねばならない。

海洋博を中心に進む日帝の侵略攻撃を粉砕しよう。沖縄海洋開発計画粉砕！天皇・皇太子の沖縄上陸阻止！沖縄解放同盟の闘いを勝利的に闘いぬこう！

3・1 朝鮮独立蜂起56周年・朝鮮人民連帯 春闘勝利労働者集会 圧倒的に成功

3、1 決意表明する東交労働者

全国の闘う労働者人民、学生の皆さん！

「三・一朝鮮独立蜂起五六周年、結集した反朴・反「国民投票」闘争、春闘勝利労共闘集会」は品川文化会館において、労共闘を先頭とする軍事独裁政権の危機を満天下に暴露した「トンネル事件」ものデッチ上げ、北朝鮮艦艇に対する攻撃に示されるごとく、朴政権の南北統一の運動の任務が提起された。集会はこの基調を圧倒的な拍手で確認していったのである。

水野委議長、総反攻を宣言

集会の冒頭、北部朝鮮史研究会の代表として登壇した朴は、「国民投票」をめぐる民族的朝鮮南半部人民の総力を結集した反朴・反「国民投票」闘争、春闘勝利労共闘集会」は品川文化会館において、労共闘を先頭とする軍事独裁政権の危機を満天下に暴露した「トンネル事件」ものデッチ上げ、北朝鮮艦艇に対する攻撃に示されるごとく、朴政権の南北統一の運動の任務が提起された。集会はこの基調を圧倒的な拍手で確認していったのである。

東交労働者より反合決戦の決意

この提起を受けて戦略的反攻戦の任務を最前線で闘い抜く三里塚現闘、「沖縄現闘の報告がなされた。二月二〇日から本格的に開始された敵攻撃に対する倉庫封鎖闘争を闘い抜く三里塚現闘、社共カクマルを中心とする沖縄解放闘争の清算派と闘い、CTS労働者を通じての沖縄現地農漁民との連帯を闘い抜く三里塚現闘、この両者の発言は戦略的反攻戦の基礎作業がその前線において、つきり鮮明にされたのである。

次いで東交共闘の代表として登壇した自治体の中にあって六〇年代を通じた自治体闘争の中で、反革命構造に対決した自治体労働者の闘いの歴史を明らかにし、第二次再建合理化との全面対決を主軸に据えた闘いを貫徹することを確認した。

現在、高松宮、秩父宮の医療施設閉鎖という形で着々とすすめられている天皇・皇太子の沖縄上陸を、たとえ、「植物学者」のベールをおかぶってでも絶対阻止する決意を満場で確認した。

我々は、つき進む日帝の天皇制イデオロギーを媒介とした沖縄の反革命的統合、アジア侵略反革命攻撃に対し、戦犯天皇とその一族、皇太子を最後まで糾弾し、若夏国体、植樹祭を上回る阻止闘争を貫いて闘いぬねばならない。

更に集会の中で、若夏国体（千葉）・大阪万博の際みられた権力の予防反革命的弾圧に対する例があげられた。これは、戒厳令体制はもちろん、権力の末端組織まで動員しての、「秩序を乱そうキャンペーン」「障害狩り」等であり、それを装った反対勢力の弾圧である。現に、沖縄「県」警は、二月から治安弾圧体制を強化しており、また、名護に精神病院の建設を予定していることが明らかにされた。

我々は、精神障害者差別までも含んだ形での反対運動弾圧に抗しきる力量をつくりあげることは緊急の任務であり、権力の策動を粉砕する反クサバンベーションを本部―沖縄一帯に押し広げねばならない。

海洋博を中心に進む日帝の侵略攻撃を粉砕しよう。沖縄海洋開発計画粉砕！天皇・皇太子の沖縄上陸阻止！沖縄解放同盟の闘いを勝利的に闘いぬこう！

東交反合決戦に突入！

—2・5反合ストを貫徹す—

全ての労働者人民の皆さん！今春反合決戦の勝利に向けた、東交労働者の断固とした戦闘宣言と、全国の闘う労働者人民諸君への連帯のアッピールを送りたい。

昨年八月臨時都議会への「料金値上げ・一、〇〇六名首切り」提案をもつて開始された東京都交通局の第二次再建合理化攻撃は本年、いよいよ重大な局面を迎えようとしており、その反人民的全容を明らかにしてきている。

コンピュータ導入をテコとした信号指令・運転・駅業務全般に亘る機械化・システム化—無人化構想を中軸に、バス路線の縮小再編成を一体として推し進めんとする第二次再建合理化案は、文字通り侵略反革命体制作りに向けた日帝の交通運輸通信網の戦略的再編の一大環としての決定的位置をもつたものとしてあり、私鉄・営団地下鉄との相互乗り入れ＝一元化構想を射程に入れた企業合併・再編成を伴つたものとして実現されんとしている。

その内容は、自動制御装置（CTC）・自動出改札装置・自動放送装置の導入＝無人化構想として大量人員整理と、職制支配・労務管理の強化を推し進めながら「赤字解消」攻撃による大衆収奪の強要（「料金値上げ」）と、労働組合の企業内化＝労資協調体制構築を背景として、「採算の合わない地区」＝被差別地区（東墨田等）のバス路線廃止、都電荒川線ワンマン化の承認を取りつけるという極めて反人民的・排外主義的攻撃（＝「障害者」排除、部落差別の強化）としてあり、単に東交労働者に限らず全人民の名において粉砕すべき攻撃としてある。

かかる攻撃に対して、都議会における積極的加担を果す社・共・公や「自主再建」路線推進による企業内化を遂げた東交民同（日共）は当局（日帝）に全面屈服・加担しその取引きに部分的労働条件獲得を追求するという度し難い反労働者的内容に「反合闘争」を歪曲しており、「労働強化反対」をもつて「障害者」の都電・バス利用の要求＝糾弾を抹殺し、被差別地区人民の排除を当局の尖兵として行うという排外主義・反革命的本質を全面化してきている。

昨年八月都議会闘争を突破口に一大反撃に起つた青年婦人労働者を先頭にした反合実力闘争の昂揚が先進的組合員によつて大衆的支持を受け、本部（民同）への鋭い攻撃を開始した事に恐怖して、七四年大会に於ける「合理化絶対反対」を掲げざるを得なくなつた東交民同は昨年末の電車部労働者による順法闘争—職場実力闘争→反合スト→現地実力闘争への発展を恐れ、当局とのボス交による「CTC工事『凍結』」なる理由ならぬ理由をもつて一二・一八反合ストを回避し、「（現地阻止闘争をやれば）労働者同志の血で血を争う闘いになる」という分断攻撃をもつて現地阻止闘争の禁止、「合理化＝人べらし反対」なる経済主義的・日和見主義路線への全面回帰を図つたのである。

今年二・五半日ストをアリバイ的に打ち、「現地で組合員を消耗させる（飯村委員長発言）」ための現地（高島平）動員を行つた東交民同は文字通り、組合員を消耗させるため、集会、ビラ配布を禁止し、将棋・囲碁を積極的にさせるという許しがたい策動を実現し「現地動員は意味がない」「電車部の問題だ」という腐敗・分断を労働者内部に作りだそうという野望を全面化してきている。

全ての労働者人民の皆さん！

朝鮮植民地化・他民族抑圧へと本格的侵略反革命を遂行せんとする日帝は、反共民族排外主義への動員と一体化した侵略反革命体制づくりの一環として、労働運動の体制内化・域内平和＝侵略反革命体制への繰り込みを画しており、同盟、JC帝国主義労働運動派はもとより、総評—民同の屈服・加担をもつて、「節度ある賃上げ」「労資協調による国家的危機の打開」なる域内平和への春闘の組織化を目論んでいる。

七四春闘における公労協の「スト権問題」への集中的攻撃（実質的剝奪）、日教組ストへの公然たる警察権力の介入弾圧、「教師聖職論」イデオロギー攻撃によつて予防的先行的攻撃をかけてきた日帝は、更に、部落差別・人民分断攻撃、天皇制—天皇制イデオロギー攻撃、刑法改悪—「保安処分」攻撃という全面的政治的攻撃の下に、労働者階級総体の屈服、暴力的反動的支配—侵略反革命（戦争）への排外主義的動員を図らんとしているのである。

社共—総評・民同は「整然たるゼネスト」「弱者救済」を呼号し、実力闘争体制を圧殺し、「賃上げ」との取り引きを日帝に請願し、議会主義への逃亡を図り、とりわけ「日共」は「教師聖職論」の下に教育労働者を敵の攻撃の前に売り渡し、狭山闘争、部落解放闘争への差別敵対・襲撃を行い、反革命的差別者集団へとなり下つている。

全ての労働者のみなさん！

かかる社共—総評・民同の経済主義・議会主義的春闘への歪曲と差別分断—侵略反革命（戦争）への屈服・加担は断固として粉砕しなければなりません。

差別・分断攻撃に対決し、部落差別、沖縄の反革命的統合—朝鮮植民地化を粉砕する国際主義の内実をかけた革命的労働運動の潮流的登場の一大拠点として我々東交労働者は、一大決意をもつて、今春東交反合決戦を闘い抜く体制を打ち固めています。東交民同の「人べらし合理化反対」＝交渉路線への歪曲、中間諸派のこれへの屈服を許さず、実力反合闘争の陣型を打ち固め、差別・分断攻撃と対決する第二次再建粉砕—東交反合決戦に全ての労働者諸君の力強い支援、連帯の闘いを要請します。

既に、現地（高島平志村基地）監視体制を構築し、三月上旬都議会終了をメドに一挙的に開始されんとしている当局のCTC搬入工事を我々は一歩も許す事なく闘い抜く決意を打ち固めています。

実力闘争体制をもつて春闘の域内平和への封じ込め—侵略反革命（戦争）への動員を目論む日帝の野望を打ち砕き、全人民解放の中心翼として労働運動を革命的に構築しようではありませんか！

全ての労働者、人民諸君は東交労働者と共に現地（高島平）に結集せよ！

☆第二次再建合理化粉砕！

☆無人化・システム化構想粉砕！

☆六号線二駅延長合理化粉砕！

☆CTC搬入実力阻止！

☆当局（日帝）の差別・分断攻撃、これに屈服する社共、中間諸派の社会排外主義と対決せよ！

☆春闘の域内平和への繰り込みを粉砕し、実力闘争の爆発で今春闘に勝利せよ！

☆部落解放—日帝打倒！

☆沖縄解放—安保粉砕—日帝打倒！

緊迫する三里塚に結集せよ！

——日本反帝戦線三里塚現闘団——

二期工区資材輸送道路着工を阻止し第三次強制収用粉砕に突き進め！

相次ぐ開港策動の破産、周辺住民の「空港反対」闘争の激化によつて危機に瀕する政府—公団・大塚体制は、「空港」内で千葉県警千二百名の「大演習」をもつて何とか自らの危機を乗り切らんとしている。

「年内開港」を宣言し花々しいスタートを切つた政府—公団は、強権的に暫定パイプラインの完成にメドをたてつつも鹿島港の燃料タンク建設が地元の反対闘争によつてまつたくメドがたたず、かといつて本パイプラインも反対闘争のため白紙状態であり、かくして大塚空港公団総裁の「念願」であつた「燃料問題」は大破壊、夢破れた大塚は、ついに二期工区資材輸送道路着工の司令を発した。

全国の同志・友人諸君！いよいよ七五年三里塚決戦の幕は切つて落された。

昨年末より開始された政府—公団の二期工区二四戸に対する攻撃は、反対同盟を主軸とした労農学によつて痛打を受けつつも以前にも増した千葉県警の応援を得て行なわれんとしている。

岩山大鉄塔破壊策動が、岩山反対同盟を先頭とした反対同盟・労農学の闘いによつて実力阻止され、敗け犬と化した政府—公団は、第三次強制収用策動を強化し、資材輸送道路（長さ一、五〇〇m、幅七m）着工をもつて二期工区着工を策しているのだ。

用地内二四戸を防衛し、この政府—公団の目論みを粉砕しなくてはならない。

第一次・第二次強制収用阻止闘争をはるかに上回る最大の闘いを実現し第三次強制収用阻止・岩山大鉄塔死守の闘いに勝利し、開港阻止・空港粉砕の闘いに勝利しよう。

日向一派の現闘団からの逃亡以降、我々の獲得した現闘活動を賭け、蜂起—プロ独派の実力を第三次強制収用実力阻止へ傾注せよ！

☆第三次強制収用実力阻止！

☆岩山大鉄塔死守！　開港阻止！

日向カクマルの反革命への転落の道

七三年六月十二CCを契機にわが同盟戦旗派より脱落し解党していつた経済主義者グループの一フラクに日向一派がある。同盟戦旗派建設の闘いより脱落した解党主義グループの中でも最も悪質な性質をもつているのがこの日向一派である。日向一派はブンドの歴史的性質とは全く異なるカクマル主義を己の立脚点にし、カクマル特有の差別性、排外主義性、右翼性を活動の中心とする反革命分子である。

今日、日向カクマルの排外主義的差別的堕落は増々深まり、われわれが既に指摘した「日向カクマルに残された二つの道—カクマルの道か四トロの道か」を内部分解を伴いながら加速度的にころがつているといえる。日向カクマルの反革命行動はわが同盟戦旗派に対する「デマゴギー」と「日向の自己弁明（泣き事）」をもつてする解党主義的敵対、更には被抑圧人民、被差別大衆の決起に連帯する「血債の実践的貫徹」に対する悪辣な妨害行為という形で現われている。われわれは、わが同盟の分派闘争のみならず広く労働者、被抑圧人民をも貫く闘いとしてこのカクマル分子との闘いを位置づけ責任をもつて粉砕しきらねばならない。

日向カクマル主義者の反革命性

日向カクマルの排外主義的差別的堕落の事実はこの間だけでも数限りない。①まず昨年日帝—寺尾の攻撃を前にして三十日「狭山無罪判決勝利」なるビラを作製した事実、②三里塚現闘からの逃亡をニセ戦旗において自己批判しつつ居直つている事実、③沖縄海洋博粉砕闘争、沖青同控訴審闘争の全面的放棄・逃亡、更に悪質なことは「O—U君を支援する闘い」に対する反革命的介入の事実、④五・一三統一公判闘争に対する分離のおしつけ、統一控訴審からの脱落（東大公判分離組の日向と同様！）の事実、⑤九・一九社共集会に加担し社共の手先となり、又労組運動への全面的没入とその内部において四トロの手先を担つている事実、このような客観的事実によつて彼ら日向カクマル集団の反階級的性質は革命的人民の共通の確認となつているのである。

とりわけ許されないことは狭山差別裁判糾弾闘争が日帝—寺尾の死刑判決を粉砕すべき正念場を迎えたまさにその時、「無罪判決になるだろう」として隊列内部に融和主義をもちこみ、日共・カクマルと同様の犯罪的役割を果したこと。そして更に日向派の下部からの「指導部への融和主義への屈服に対する不満」に対して「フォードでやるから」といつて排外主義的に乗り切るといつた腐敗ぶりである。又沖縄人民との連帯の闘いに対してSやOは昨年秋「今は狭山と朝鮮」「沖縄などは知らない」といつて海洋博粉砕闘争・山口重光君支援闘争からの反動的逃亡をきめこみ、自己の主体的反省や沖縄解放闘争の今日的地平を顧みることなく、「課題がないから今度は沖縄だ」として「[redacted]支援闘争」に反革命介入し戦線を混乱させていることである。これが彼らの「モウセイ」の中味なのである。又ニセ戦旗三五二号で「反対同盟との日常的結合が実現できてない」といつて三里塚現闘からの逃亡を自己批判しているようだが、右翼日和見主義者たること自身は全然変らないのだ。

組織体質にみる帝国主義的腐敗・堕落

ところで日向カクマル集団の政治的本性について確認すれば（勿論日向カクマルの運動と組織が余りにも共産主義者同盟と戦旗派の歴史的到達地平とは無縁なカクマル的腐敗のため、そもそもまとめて批判すべき対象ですらないわけだが）—党組織建設上においてはⓐ反革命差別者日向を頭目とする差別的徒党でありカクマルの如き基盤すらもつことのできない小経済主義集団にすぎないこと。すなわち彼らの頭目日向は、六八年にカクマルとの党派闘争の最中に逃亡し新宿でフーテン的に堕落し自己批判して党に復帰したが、今度は高原学対に敵対し右翼反動大会たる六八年八回大会の反動的尖兵となり歴史的に最も右翼的な八大会学対を作りあげ七〇年安保決戦の闘う前からの敗北を準備し（これを実行したのが沢木である）、又戦旗派建設においては女性差別事件を数度にわたつてひきおこし（日向のコロンタイ以下的自由恋愛主義的腐敗）その度ごとに中央委員会へ自己批判書を提出するという腐りきつた小ブルデイレッタントというものである。この腐敗した日向を政治主義的に擁護するためにのみある集団として日向一派があり、その政治的結集軸からして階級的影響を彼らがもつことなど有りえないのは当然なのである。組織体質においても反革命差別者日向を擁護するにふさわしい差別主義・排外主義体質で作り出されている。日向の差別的腐敗の現実を擁護するために「共産主義者も一皮むけば俗物だ」「自分だけではない」、更に「組織内の差別糾弾闘争は組織の団結を弱める」というカクマル的差別理論で塗り固められ、内部からの腐敗に対する追求には官僚主義的に居直るという現実である。彼らの内部の被抑圧人民に対しては融和主義的腐敗を強要、徒党の支配維持のためには非主体的な雇れ人的思想を要求するのである。

ⓑ更にこの差別主義的、ブルジョア能力主義的徒党拡張をより反革命的に正当化せんとする内容として唯一理論的体裁をもつて打ち出されたのがニセ戦旗三五三号における「被抑圧人民、被差別大衆の党として成長してはいけない論」である。彼らはそれを「被抑圧人民を組織化してはいけない」という体裁をもつて主張しているが本音は「自分達には被抑圧人民、被差別大衆を結集していない。都市小ブルと医者と労働貴族の子弟によつて構成されている。だから革命的なのだ」「被抑圧人民、被差別大衆の革命的前衛党建設に向けた現実の闘いなどには責任をもつ必要はない」という反革命差別・排外主義理論なのである。被抑圧人民、被差別大衆の現実の闘いについて一切具体的・実践的に学ぼうとせず、そもそも己の帝国主義的堕落を真実に血債する闘い、支持連帯の実践を通した命がけの飛躍を追求すべく被抑圧人民、被差別大衆との生き生きとした緊張関係を通した闘いという現実から一切逃亡し「モウセイ」念仏を抑圧者の中で得意げに吹いて回るという代物なのである。

党の実践的自己批判の貫徹とは現実に決起する被抑圧人民、被差別大衆の闘いにいかに現実的に支持連帯するのかという問題なのであり日向カクマルの如く実践的支持連帯を放棄した上で「モウセイ」をプロレタリア本隊内部で宣伝し得意になつていることとは全然違うのである。日向カクマルは「抑圧民族の党」「抑圧者の党」である現実を居直り正当化し、被抑圧人民、被差別大衆の現実的苦闘とは無縁なところで「モウセイ」を啓蒙して回るという極めて卑劣な集団なのだ。

部落産業を防衛し部落大衆の生活権を奪還する具体的闘いに対する支持連帯の闘いを一切放棄し逃亡し去つた事実こそ問題なのである。こんな差別者集団に狭山闘争の総括などできるはずもなく、できないが故に日向カクマルはその逃亡行為の「正しさ」を証明する（？）ために差別理論を作り出したのである。

血債にかけ、被抑圧人民に連帯せよ

わが同盟戦旗派は十二CC以降、カクマルに屈服した日向—城山グループとの闘いを、同盟の差別排外主義との闘い＝「血債にかけて」自己批判を実践的に貫徹することであると確信し、口先で「自己批判」を連発することや、この任務を学習会の一課題に陥しめること、政治暴露の一つとしてしか位置づけられないといつたカクマル主義的傾向との闘いとして貫徹し、日常不断の支持連帯を通して己の帝国主義的堕落を不断に点検し革命的自己変革を獲ちとることを目ざして闘い抜いてきている。

このわが同盟の実践を日向カクマルは自分達の差別主義的色めがねに合わせてみることしかできないため「解放組織乗つ取り」と映るのである。わが同盟はかかる支持連帯と実践の中でわが同盟の集会への戦闘的被抑圧人民、被差別大衆の結集をかちとるという地平を切り開いてきたのである。もとよりそれはわが同盟が闘う被抑圧人民、被差別大衆の「糾弾」を受けとめ徹底して自己変革を思想的＝組織的にかちとる過程での前進であるとはいえ、被抑圧人民の党としても成長するという観点から見ればわが同盟自身未だこの実践的自己批判において決定的に不充分であることを自覚している。

だがしかし、日向カクマルが「被差別大衆の結集はせいぜい集会動員である」というとき、これ程被抑圧人民、被差別大衆を侮蔑した言い方があるだろうか。被抑圧人民、被差別大衆が自からの決起の中で政治闘争に決起することの現実的重みを全然とらえていないのである。日向カクマルにとつて被抑圧人民、被差別大衆は単なるモウセイ念仏のための客観的対象の一個として構成されているにすぎず、彼らの日帝打倒—日本プロレタリア革命への決起などは全面的に無視されるのである。

わが同盟は日向カクマルの今日の堕落を批判しても何の意義もないことを確認している。問題はわが同盟がどれだけ被抑圧人民、被差別大衆と連帯し闘い抜けるのか又そのことを通して革命主体内部の変革を勝ちとり、革命主体内部における「社会革命」をなしとげ強大な革命勢力を作り出しうるのかどうかということなのである。

侵略反革命への女性の動員を粉砕せよ!!

日本帝国主義は、南朝鮮への侵略反革命を突破口に、東南アジアへの全面的な侵略反革命戦争を遂行せざるをえない現在にあって、国内の統治の再編を強行している。とりわけ女性への攻撃と矛盾の集中はますます激しいものとなっており私たち日本の女性が、この侵略反革命体制にくみこまれるのか、これと対決し粉砕しきれるのかという重要な岐路に突入している。このような闘いの端初として、三・八国際婦人デーと、三・二六沖縄女性問題シンポジウムをかちとらなければならず、すべての女性の決起を訴えます。

全都女性解放研究会

国際連合は、環境年、人口年にひきつづき七五年を婦人年とし「平等、発展、平和」をテーマにさまざまな会議、研究を計画している。日本政府も労働省婦人少年局を中心に「婦人の社会参加」「男女差別撤廃」をかかげ、一大キャンペーンをはってきている。

これらのキャンペーンが、実は日本帝国主義の婦人政策の一環として位置づけられ、プロレタリア女性の苦悩を右から再編しようとするものである。

かつて、ウーマンリブにより、既成の婦人運動と、新左翼への告発がなされてから、五年めに入った今、新しい帝国主義を打倒する女性解放闘争は、様々な先鋭な闘いを打ち抜きつつも一定の停滞を克服できないでいる現在、七五年をどう闘うかが問われている。

蜂起ープロ独派においては、女性解放への問題提起と闘いはありつつも、総体として経済主義的傾向に打ち勝つことができず、私たちもまた融和主義に屈服していたことを自己批判的にとらえかえしていかなければならない。差別者集団日向一派との闘いの中で私たち女性の融和主義への屈服という否定的事態の克服をかちとりつつある。

このような総括をふまえ、日帝の激化する女性差別攻撃を糾弾する闘い、とりわけ帝国主義足下のプロレタリア女性の闘いの質的飛躍を克ちとらなければならない。

日帝の女性差別攻撃を粉砕せよ

現在、日本帝国主義は東南アジアへ向けた侵略反革命の強化の中で、日帝内部に存在する女性をそれへ向け政治的イデオロギー的に動員せんとする攻撃が、職場、家庭、教育等々の場にかけられてきている。

≪労働の場で≫

婦人労働者への攻撃は、労働基準法全面改悪を軸として目論まれ、既に勤労婦人福祉法、雇用保険法立法などにより、母性保護をとっぱらい、職業病の激発を一切かえりみない労働強化が現実的に先行的に実施されている。そして家庭女性の職場へのひきだしも強力にすすめられている。①女性を職場にひきだし、悪条件で酷使すること、②差別賃金を固定化し、低賃金構造を強化すること、③無保証、短期労働力として、いつでも調節できる景気の安全弁として、過剰労働力として位置づけること。この三つを核として、パートの戦略化、結婚・出産・育児退職の強制と中高年再雇用という女性の生涯の収奪体系をつくりあげている。

一方では、ウーマンパワー政策や一部エリート女性の育成をもって、婦人労働者同士の団結に対する分断、融和攻撃がかけられている。これらを通して、また女性差別の拡大再生産を構造化せんとしているのだ。

≪優生保護法≫

優生保護法改悪は、その優生保護イデオロギーの強化と、女性ー母親を差別思想へと動員せんとするものである。「羊水チェック」をすべての妊産婦に強制し、「健全な日本の子」「優秀な労働力」以外は産むなというどう喝を迫り、女性を「障害者」抹殺の下手人に仕立てあげんとしている。更に経済的理由では人工妊娠中絶はできないこととし、労働者人民の「生み育てがたい」現実を切りすて、ブルジョア性道徳によるしめつけと「貞節な女」と「ふしだらな女」像をキャンペーンすることにより分断し、女性を家庭におしこめようとするものである。

被抑圧人民と連帯する闘いの発展を

現在、南朝鮮人民の、反朴・反日帝闘争の中で、日本の男のキーセン買春旅行という、日本プロレタリア人民の腐敗が暴露されている。日本帝国主義の政治、経済、文化全領域にわたる侵略の中で朴カイライは、南朝鮮女性に、観光誘致政策のいけにえとして、「売春」を強要している。日帝資本の強収奪による生活苦においつめられた彼女たちは、当の差別者である日本の男に肉体までものサービスをしいられ、しかもそれでしか生活をたてられなくなっている。

私たちは、日本の女として、その腐敗を支えてきた責任において買春夫を糾弾し、差別旅行を粉砕し、彼女たちとの連帯の一歩としなければならない。

七月海洋博の強行を前に沖縄の女性は、日米帝による七二年「返還」後も「基地と買春」を存続、強化する攻撃、自衛隊の上陸、「本土」資本の上陸による土地買いあげや物価高の中で苦しみ「本土」への出稼ぎ、海外移民、サービス業への転身、そして「売春」を強いられ、その生活の破壊は激化している。

とりわけ、海洋博をメドに、米軍向けのバーやサロンが「本土」向けに改造され、若い娘たちをあらたにひきいれ、「本土」暴力団の進出・統合をふくめて、「本土」の男向けの買春の島として再編されようとしている。

このような中で、「本土」からの出稼ぎ労働者（海洋博工事の）の暴行事件が激発し、沖縄女性は中学生まで、一人で歩けない状態にさらされているのである。

沖縄は、日本帝国主義にとってアジア侵略反革命へ向けた重要な基地としてあり、日帝は沖縄人をもまた、侵略の尖兵へと「同化」する為に海洋博を強行、「基地とCTSと買春の島」へと反革命的に統合を完成せんとしている。すでに革命的な沖縄女性の決起と糾弾の闘いがおこなわれている。私たちは「本土」の女性として、彼女たちの提起をうけとめ、海洋博粉砕と買春の島化阻止の闘いに連帯・決起していかなければならない。

今後の闘いの方向

今日日本帝国主義がアジア全域に侵略反革命攻撃を全面化させ、これに向けた国内体制づくりを差別・排外主義攻撃、人民分断支配に求めているとき、この攻撃に対決すべき私達日本女性、私達プロレタリア女性の任務は一層重要になり、闘う女性の主体的内実が抜きさしならないものとして問われてくる。

日帝の侵略反革命を許さず私たち女性への融和攻撃を断固として粉砕し、女性解放闘争内部に発生する一切の融和主義と訣別し闘うことが重要であり、この融和主義との闘いなくして朝鮮人女性の決起、沖縄人女性の決起を「血債にかけて」受けとめていくことはできない。

融和主義に屈服した日本共産党は、「母親大会」にみられるごとく「婦人の関心、平和を願う心を生活を守り独占企業を許さない一票としましょう」といい、ブルジョア女権運動そのものとして現われているのである。また主婦の仕事（家事・育児）を尊敬して、一人一人が民主主義的な家庭をつくるようにしましょうと言うに至っては、日帝の「健全な家庭」と何の違いもなく、もはや女性解放をおしとどめる反動以外のなにものでもない。

そして、このような既成の婦人運動から訣別した（せんとしている）女性解放闘争においても、経済主義・組合主義に結果的にくみ込まれている傾向と、リブ諸派にみる鋭い差別糾弾の闘いはありながらも感性的無政府的な領域から脱皮できずにいる傾向へと分岐が進行している。これら二つの傾向はこうした闘いにとどまっている限り、帝国主義の強権的統治形態の再編の前には、解体され、融和主義にひきずりこまれる道しかないことは明らかだろう。

私たちは、不断に告発、糾弾を闘い抜いている多くの女性の闘いを継承すると同時に、リブ派の差別糾弾の意義をも継承し現在の一定の否定的な情況を止揚する女性解放闘争の新たな質をかちとらなければならない。侵略反革命戦争へ女性が動員されるのか、これと対決し粉砕しきれるのかが問われているのであり、こうした闘いを女性解放戦線が獲得しきれないかぎり、個々の糾弾の闘いもブルジョアジーによって粉砕されるしかないと言えるだろう。

私たちは帝国主義の侵略反革命・差別・分断攻撃と対決する闘い、被抑圧民族・被差別人民と真に連帯しうる闘いを切りひらくべく特に闘いの緊急な課題として、沖縄解放闘争・反日ー朴打倒闘争を闘う女性との連帯をかちとらなければならない。

「沖縄女性問題シンポジウム」にすべての女性が結集し、自らの責務として海洋博粉砕への決起連帯をかちとっていこう。

沖縄女性問題シンポジウム
3月23日六時南部労政会館

75年春期における革命的労働者の政治的任務

全国の同志諸君！　すべての闘う労働者人民諸君！

七五年、革命的労働者被抑圧人民の日帝打倒ー革命的内乱、階級的激突戦にむけた革命的な闘いが開始されんとしている。

現情勢のきわめて大きな特徴は、日帝の侵略反革命・戦争体制構築に向けた諸政策の強行が内外の政治的経済的危機の蓄積と階級的諸矛盾の先鋭化を急速に進行させ、ブルジョアジーのプロレタリア人民に対する階級的支配・政治的影響が崩壊し始め、その亀裂が大規模に進展し、階級闘争の革命的・戦闘的発展の一大転換点へと発展しつつあるといえる。

かかる情勢にあって、党ー革命勢力はプロレタリア人民の最も緊急な階級的利害の防衛、経済的・政治的奴隷化に対する闘いを最先頭で担い切り、プロレタリア大衆の膨大な自然発生性、積極性に対する主体的立ち遅れを一掃し、ファシズム権力への転換を不可避とする国家形態のボナパ的再編との闘いを強め、日帝の侵略反革命を革命的内乱に転化し、戦略的決戦に勝利する具体的準備に着手しなければならない。

七五春闘の戦闘的・革命的爆発を獲ちとり、天皇の訪沖、訪米絶対阻止へ突き進め！

第一章　日帝の侵略反革命を内乱に転化せよ

日本帝国主義によって現在ドラスチックに展開されている侵略反革命＝朝鮮植民地化攻撃は、日本プロレタリア階級人民を再び歴史的危機に投げ込み、再度、帝国主義的侵略・他民族抑圧から侵略反革命戦争へと一挙に転換せんとしている。

六五年日「韓」協定を突破口とし、国際反革命同盟の再編強化をテコとした東南アジア・極東に向けた侵略反革命政策の具体的進行、就中、七〇年安保同盟の再編強化、七二年沖縄の反革命的統合、その後急速に強化した朝鮮南半部への植民地化攻撃、これらの日帝の野望は、現代過渡期世界の七〇年代的様相である国際的階級危機の本格的成熟、帝国主義世界再分割戦の激化と、それが生み出す政治的・経済的危機の激発の諸関係のもとで帝国主義国家としての命運を賭けた自衛隊の海外派兵ー軍事的進出、侵略反革命戦争への進展に他ならない。七〇年代において本格的に開始された日帝の侵略反革命戦争政策は、米帝を盟主とする世界反革命支配に貫かれた戦後世界体制の崩壊的危機、後進国・植民地従属国の民族解放・革命戦争の勝利的前進に象徴される国際的階級闘争の未曾有の高揚に規定されている。日帝の戦後的発展を支えた諸条件はすでに解体し、諸階級の対立は先鋭化し、革命と反革命の激突へと発展し、高度成長を基礎とする日帝の政治支配体制としての「議会制民主主義」はすでに過去のブルジョア独裁の統治形態にならんとしているのである。

現代過渡期世界における帝国主義の基本的矛盾である侵略反革命戦争は、米帝のみならず全ての帝国主義諸列強にとって、その延命の基本的条件であり、従ってここに革命闘争の凝縮された革命と反革命の真向うからの激突の不可避性をみてとることができる。五〇〜六〇年代において、米帝の恒常的侵略反革命戦争に支えられて帝国主義的復活・発展をとげてきた日帝にとって、七〇年代においては自らが侵略反革命戦争へと突き進むことが、その帝国主義的延命の不可欠の前提にならんとしているのである。

日帝の侵略反革命戦争体制への一大飛躍は、同時に、国家権力・国家形態のファッショ的転換をもって初めて完成する以外になく、そのために内外の諸条件、就中、革命闘争の内乱的発展に対抗し、「上からの内乱」反革命攻撃、ボナパ的国家形態への移行を開始し、ファシズムを準備せんとしている。

日帝の侵略反革命に向けた諸攻撃の性格

われわれは、七〇年代帝国主義の世界分割戦争の激化、国際的階級危機の本格的成熟といった革命と戦争の時代の危機的様相のなかに、日帝の①侵略反革命戦争政策、②ボナパ反革命的政治攻撃、③差別排外主義攻撃、④経済的攻撃についての基本的性格を確定しておかねばならない。

まず第一に、日帝の侵略反革命の開始、日米安保国際反革命同盟の再編強化、沖縄の反革命的統合によるアジア盟主への大胆な独自的発展、五・一五侵略反革命体制の構築、朝鮮植民地化攻撃、日米「韓」共同軍事体制の確立ー七〇年代初期のアジア侵略反革命戦争体制の諸政策の強権的遂行は、帝国主義の世界再分割戦、就中、後進国・植民地再分割としてあり、㋑戦後世界体制の解体的局面において一層激化しつつ、㋺日帝のアジア植民地再分割戦こそ自らの帝国主義的延命の生命線であり、㋩アジア諸国における民族解放・革命戦争の歴史的前進に対抗するための絶望的な転換である。

従って、日帝の侵略反革命諸政策の強行は、国内における政治的経済的危機を激発し、階級闘争の革命的発展を激化させるだけでなく、アジア植民地人民の総反撃に直面し、後進国植民地体制の危機と、内乱ー内戦をかかえ込み、日本プロレタリアート人民と被抑圧人民の国際主義的結合を不可避に促進させていかざるをえない。帝国主義にとって死活の条件である植民地支配体制の危機こそ革命の決定的条件であり、日本革命にとって、日米安保国際反革命同盟粉砕、沖縄の反革命的統合粉砕、朝鮮植民地化攻撃粉砕こそ、最も戦略的位置をしめている。

日本の党ー革命勢力・プロレタリア人民にとって最も核心的問題は、朝鮮・沖縄・アジア人民の反日帝闘争、反共軍事独裁体制打倒民族解放・革命戦争の永続的前進と革命的に結合し、日帝の侵略反革命・侵略反革命戦争体制構築の攻撃を革命的内乱ー蜂起へ転化する革命闘争を実現しえるか否かにかかっている。

第二に、日本帝国主義は、アジア侵略反革命と植民地支配体制の確立に照応したファッショ的国家への転換に向けたボナパ的国家形態への移行を急速に展開させ、「上からの内乱」反革命攻撃を露骨に促進させつつあり、すでに五〇〜六〇年代「ブルジョア議会制民主主義」を全面的に解体せんとしている。

日帝の「上からの内乱」反革命攻撃は、旧来の政治支配体制の危機という事態にあって、自らの階級支配の基盤を喪失し、新たに唯一の拠りどころを官僚・軍隊・警察支配体制に見い出さんとし、階級闘争の歴史的発展、プロレタリア人民の革命的決起の圧殺・解体、侵略反革命戦争の尖兵への動員を公然と目論まんとしている。就中、帝国主義的軍隊＝自衛隊は、「自衛」などという控えめなデマ宣伝すら公然と打ち捨て、侵略反革命戦争体制・治安維持の確立、国家総動員の準備、そして帝国主義政府の政治的階級的危機に反革命的に対抗する軍事クーデターを公然と宣伝し、反共・反革命思想教育を徹底化させんとしているのである。

即ち、一方において、国会での反動的諸立法の制定、法体系のファッショ的準備、自民党の独裁的支配の危機の小選挙区制攻撃をもっての乗り切りを画策しつつ、他方において、帝国主義軍隊・右翼反革命による軍事クーデター計画の公然とした宣伝、具体的準備、ここにブルジョア独裁を強化・防衛せんと侵略反革命戦争体制への暴力的転換を推し進めんとする日帝の「上からの内乱」反革命攻撃の典型的方策をみてとることができる。戦後革命の敗北以降、日本資本主義の帝国主義的発展において特徴的であった、階級闘争の平和的進行の段階はすでに喪失され、プロレタリア人民の今日的闘いは、日帝の反革命攻撃に絶対決し、ことごとく反撃・粉砕していくことが火急の任務としてあり、革命と反革命の激突は、日帝のボナパ反革命ーファシズムへの道を許すのか、革命的内乱ー蜂起の大道を切り拓くのかという二つの戦略的決戦が不可避に問われざるをえない。

そして第三に、日帝の「上からの内乱」反

革命攻撃は、差別（分断）排外主義攻撃として互いに不可分のものとして激化していることを把えておかなければならない。それは、レーニン帝国主義論において、充分あますところなく規定されている如く、金融資本的蓄積様式に基づく金融寡頭制支配国家権力体制は、過剰資本の処理の必然的結果、帝国主義戦争を必然化させ、政治的反動を全面化し、寄生性・腐朽性を強めるわけである。

対外的には他民族支配・帝国主義的侵略へとつき進み、対内的には諸階級・層の差別・分断を持ち込み、帝国主義的差別主義を流布し、差別（分断）排外主義攻撃をもつて帝国主義的政治支配体制を構築するに到る。

沖縄の反革命的統合と沖縄民族差別、海洋博攻撃、在日中朝人民に対する入管法―入管体制をもつてする民族抑圧―政治攻撃は、党―革命勢力の決定的弱さ故、プロレタリア階級・人民の階層分化の促進と帝国主義的腐敗・堕落を物質的基盤とする差別排外主義イデオロギーをテコとして暴力的強行を許してしまつており、更に、部落民・「障害者」・被爆者・女性に対する差別分断抑圧攻撃、融和攻撃として具体化され、帝国主義的抑圧民族と植民地被抑圧民族の二大分裂、差別者―被差別者の分裂を不断に拡大・固定化せんとするのである。

これら日帝の差別・排外主義攻撃は、戦前天皇制権力支配に最も典型的に示された如く、プロレタリア大衆内部の民族的差別的偏見、権威主義を温存・助長・拡大させる国家権力―支配階級の最も反革命的な政治的・イデオロギー攻撃であり、被支配階級・プロレタリア人民の階層的分化の拡大・固定化と帝国主義的差別排外主義・社会排外主義への反革命的転化に他ならない。

第四に、帝国主義の戦後的発展である高度成長のゆきづまりとその発展を支えた国際的・国内的条件の解体・喪失からくる労働者階級人民への経済的攻撃、合理化、レッドパージ攻撃が、日帝の侵略反革命戦争体制への転換、産軍複合体への急速な移行を決定的メルクマールとし、そして、帝国主義間対立、世界再分割の本格的開始を基底に露骨に開始されてきている。

戦後の日本帝国主義の発展の根拠となつたIMF―GATT世界体制に支えられた高度経済成長は、総破産に直面し、一切の解決方策を喪失している。五〇年代における西欧・日本の帝国主義的発展は、六一年「ケネディラウンド」に示されるように帝国主義間対立を顕在化させ、六〇年代後半において、ドル危機の構造化と米帝の地位低下を決定的にさせ、七〇年代に突入することをもつて、単に経済的側面においてだけでなく政治的経済的軍事的全領域において帝国主義間争闘・再編へと移行し、戦後世界体制・経済体制は完全に崩壊的局面へと移行した。七一年ニクソン「新経済政策」、七二年「スミソニアン協定」七三年各国通貨の総フロート制への移行、七四年石油危機（戦争）に示される資源争闘の激化といつた危機的事態の進展は、その帝国主義間対立、争闘の根源を鮮明に浮きぼりにするだけであり、帝国主義世界経済の縮少化・ブロック化を益々促進させ、と同時に帝国主義諸列強の経済的総破綻的事態へと発展させ、かかる危機の唯一の解決策としてプロレタリア人民にその矛盾を転化させ、階級間の対立、階級闘争の激化を不可避的に生み出している。

就中、日本帝国主義は、天皇制ファシズム権力解体後のいわゆる戦後的発展の総破綻と、その物質的根拠であつた高度経済成長の完全な解体と帝国主義世界再分割戦、経済争闘、アジア植民地再分割の激化のなかで、帝国主義的延命の唯一の解決策として再び戦争政策へと突き進まざるをえない。

そのために現代帝国主義諸列強は、米帝にその最も典型的形態であつた侵略・戦争・他民族支配、寄生性・腐朽性の最も極限化された金融寡頭制支配に基づく侵略反革命戦争―産軍複合体制へと急速に煮つめている。従つて日帝の経済的攻撃は、金融資本・巨大独占の軍事経済化への移行、植民地化攻撃―他民族支配、戦争体制の構築と一体化された攻撃に他ならず、国際的経済危機に対処する産業再編成、巨大独占企業のための諸々の経済政策による労働者階級人民への一切の矛盾の転化、失業者の膨大な発生、インフレの拡大と生活破壊攻撃、大合理化攻撃、首切り、一時帰休、出向、配置転換、マル生等思想・レッドパージ攻撃として継続的に具体化され、質量ともに戦後最大の規模で貫徹されつつある。しかも、この日帝の経済政策と攻撃がこれまでの自民党独裁支配―国内階級平和を維持してきた階級関係、社会経済構成を一変させ、諸階級の対立の激化、階層間の分解・没落を促進させていかざるをえないのである。即ち、七〇年代以後の日帝の経済的攻撃は、侵略反革命戦争政策への転換、資本主義の没落期のそれであり、五〇～六〇年代高度成長期の設備投資主導型経済発展を基礎とする金融寡頭制の確立下の経済的攻撃とはその質を全く異にしている。

現在進行している「世界インフレ」「石油危機」などの国際的経済的危機の具体的激化は、各国帝国主義列強の経済的攻撃をより強行させつつあるわけだが、その根底において現代帝国主義の基本的矛盾である侵略反革命戦争―帝国主義再分割戦と切り離して考えることは絶対できない。現代帝国主義と戦後世界の帝国主義世界反革命体系は、米帝の第二次帝国主義間戦争を通じた圧倒的軍事・経済・政治的力量の集中を基礎に形成され、産業構造の重化学化、軍事経済としての産軍複合体制を存続・発展させ、膨大な過剰資本を統一的世界市場の再建、後進国植民地の独占的確保を通じて処理し、更に民族解放―革命戦争と対「労働者国家」群に対する国際反革命軍事同盟の形成と侵略反革命戦争の恒常的遂行をもつて解決せんとしてきた。現代帝国主義の世界反革命支配と帝国主義の国際的関係は、米帝の産軍複合体に基礎をおく政治経済構造と侵略反革命戦争―軍事スペンディング政策に決定的に規定されつつ、しかも西欧・日帝等の不均等発展に伴う重化学工業化の確立による国際的対立の激化のなかで、米帝の国際競争力の後退、軍事産業部門を除く生産部門の経済的停滞をもたらし、帝国主義の寄生性と腐朽性を極限的に深め、七〇年代帝国主義世界再分割を全面化させたのである。

現代帝国主義の世界再分割戦は、インドシナ植民地従属諸国の民族解放・革命戦争による米帝の軍事的敗北という帝国主義にとつて絶望的な局面において激発していかざるをえず、就中、日帝・西独帝は、安保・NATO国際反革命同盟の覇権の確立のための軍事力の強化、植民地争奪戦の激化、侵略反革命戦争体制への転化をすでに開始しているのである。

革命的労働者人民の基本的任務は、「日帝打倒―プロ独政府樹立」の基本戦略の下、日帝の侵略反革命戦争政策、「上からの内乱」反革命攻撃、差別（分断）排外主義攻撃、経済攻撃に総対決し、ボナパ国家形態への移行を許さず、革命的内乱―蜂起、戦略的決戦の勝利に向け、党―革命勢力の飛躍的前進を獲ちとつていかなければならない。

七〇年代中期戦略的反攻を戦取し、植民地従属国被抑圧人民の民族解放―革命戦争の永続的前進との国際的結合こそ、日帝打倒の戦略的総反攻に勝利する決定的条件である。

第二章　日帝のボナパ的転換と現情勢の特徴

日帝のアジア侵略反革命の諸攻撃は内外の階級情勢を激化させ、国内諸階級の政治的流動、階層的分化を根底から促進させ、革命の客観的諸前提を広汎につくり出している。

現在の階級情勢はレーニンの規定した「客観的革命情勢」への転化を本格的に成熟させ、と同時に、「主観的革命情勢」をも急速に煮つめつつある。

われわれは日帝の諸攻撃が必然化させる革命の基本的任務、国家形態のボナパ的移行、諸階級の政治的関係、現情勢の基本的特徴を次に確認していかねばならない。

革命と反革命をめぐる現情勢の特徴

現在の階級情勢の特徴は日帝のプロレタリア人民に対する政治的影響が崩壊し始め、日帝の「上からの内乱」反革命攻撃に総対決する全人民的高揚、革命と反革命の階級激突、内乱的激闘へと突入し、国家形態のボナパ的移行と成長を生む典型的な階級的基盤へと成熟し、革命的左翼とプロレタリア人民の革命的結合のためにはとりわけ、日帝を「左」右から支える諸々な社会排外主義、日共排外主義、右翼反革命との闘いの勝利を日帝打倒の重要な一環として課しているのである。

現情勢の基本的特徴の第一は、日帝の国内政治支配体制の危機が経済的危機と相乗化され、プロレタリア階級のみならず、小ブル諸階層に対する政治的・経済的影響力を喪失し始めている点である。

日本資本主義経済において支配的な金融資本は帝国主義間対立の激化、国際的経済危機の永続的、没落的過程のなかで、その金融寡頭制支配の強化、国家的統制を強め、独占的―寡占的産業再編成を推し進め、中小企業の再系列化、取り潰し、農漁民の生活破壊、プロレタリア人民の階層分化を促進させ、一部の小ブル化した特権階層を除いた大多数のプロレタリアの生活の全面的破壊、経済上、政治上の完全な無権利状態へと落し込まんとしている。

日帝の政治支配体制の唯一の支えであつた経済的発展という幻想は一挙にくずれさり、諸階級の経済的利害対立は政治的対立へと発展し、支配階級に対する不満と不信が爆発寸前へと高まつている。日帝の経済的攻撃は警察的支配をもつてのみ唯一貫徹され、政治的攻撃は階級闘争の平和的形態から内乱的激突へと不可避的に発展させていかざるをえない。

第二の特徴は、日帝が国家権力のボナパ的再編の積極的役割を使命とする反革命同盟軍、反共突撃隊、右翼反革命を大胆に育成し、警察・官僚・軍隊的専制支配の反革命的補完物へと繰り込み、自らの反革命性の隠蔽と超階級的幻想の決定的手段として利用し始めていること、である。

民社・公明の反共政党は議会における自民党支配の危機を右から支え、民社党はすでに自民党と融合し第二自民へと変質している。

同盟・JCに代表される帝国主義的労働運動は企業防衛・国益・国防・反共イデオロギーを軸に、侵略反革命の最尖兵の役割を担い、プロレタリアの政治的解体の反共突撃隊として機能し、民間大企業の反共組合をテコとして社民の基盤を掘りくずし、労働戦線の右翼的〝戦線統一〟を画策している。

更に、右翼諸団体・反共宗教団体は革命に対する武装襲撃隊としての合法的権利を与えられ、労働争議に反革命介入し、紀元節復活を突破口に靖国法案上程策動（六九年）を頂点として総結集し、政治過程に急激に登場しつつある小ブル諸階層を反共排外主義、天皇制・天皇制イデオロギー攻撃の尖兵へと動員する積極的役割を負わんとしている。

ボナパルティズム反革命はプロレタリアートとブルジョアジーの二大階級を基軸とする階級激突が不可避的に煮つまり、労働者人民―革命勢力の革命的内乱の公然化が開始されるとき、超階級的、超党派的装いをこらし、警察・官僚・軍隊の独裁体制を基礎に、革命の圧殺・解体を階級支配を維持することを主要な目的とする内乱期の反革命統治形態である。

日帝は七〇年代階級闘争、諸階級の政治的高揚に対抗する政治的反動の強行、国家形態のボナパ的転換を開始し、戦後民主主義から反共イデオロギーへと国家主義の基調を転換させ、天皇制イデオロギー攻撃を激化させ、政治支配体制の危機の進行のなかで反共イデオロギーを中軸とする一切の勢力を結集させ、革命勢力に対抗する反革命政治勢力へと育成し、反革命武装襲撃をすでに現実のものとしているのである。

第三の特徴は、国内階級平和の存続を自らの延命の決定的条件とする社共人民戦線が日帝のボナパ勢力への移行を「左」から支え、侵略反革命体制下の城内平和を積極的につくり出さんとしており、広汎な労働者人民の革命的・戦闘的部分から完全に見放され、階級闘争の内乱的発展に恐怖・敵対し、社会排外主義の立場を鮮明にしていることである。

ブルジョア独裁の議会制民主主義的形態からボナパ的国家形態への移行において、社共の果たす階級的役割として、次の諸点を明確にしておかねばならない。

まず第一に、階級闘争の内乱的発展を回避・鎮圧し、日帝の「上からの内乱」反革命攻撃の前にプロレタリア人民の武装解除と政治的解体を促進させ、レッドパージ攻撃を積極的に組織化する事。

第二に、警察・官僚・軍隊的独裁であるボナパ権力の存続のための唯一の「左」翼的支柱として国内階級平和の防衛を自己目的化し、合法政党としてファシズム運動との「平和」協定をも結びうる事。

第三に、プロレタリア人民の戦闘化・左傾化を抑制するだけでなく、革命に対してのみ武装反革命として登場する事。

第四に、社民の階級的基盤は帝国主義の侵略反革命、寄生性腐朽性の深化とともに進行するプロレタリア階層分化を基礎に、プロレタリア上層に依拠したものであり、その階層的利害を防衛し、大多数の下層、被抑圧人民と徹底した敵対的関係にあり、帝国主義的腐敗・堕落、差別主義、本工主義に貫かれていること。そして、社共はともに、合法政党―議会主義路線で一致し、人民の不満、義憤を組合主義、体制内へと吸収することをもつて政治支配体制を支え、日帝の侵略反革命、戦争体制構築の「左翼」的支柱として反階級的役割を果たしている事、等である。

日共の「民主連合政府」構想、社会党の「国民連合政府」構想は民社・公明の反共「政権」構想、自民党の新保守政権の可能性などという反共デマゴギー攻勢の激化と、社会党そのものの長期没落過程といつた事態の進展のなかで、全く現実的根拠を喪失しつつある。とりわけ日共は七四～七五年、部落解放同盟を先頭とする狭山差別裁判糾弾＝石川青年奪還の全人民的高揚の過程で、その差別者集団としての反革命性を一挙に大衆的に暴露し、増々、反革命的敵対を深めつつある。

これらの社共に共通する反階級的役割は七〇年代階級闘争の革命的発展過程で大衆的・全人民的な規模で鮮明になりつつある。スト破り以外の歴史的経験をもたない日共はすでに立派な小ブル議会政党へと堕落し、ブルジョア法・国会・選挙等、議会活動といつた帝国主義的統治形態をその唯一の階級的支えとして打ち固めているのだ。

第四の特徴は、諸階級・人民がこれまでどおり生活できなくなるという政治的経済的状態の進行のなかで、既成諸政党のブルジョア的取り引きと行政的機構・体制的諸組織の枠を大きく突破し、公然たる政治闘争、政治過程へと登場しはじめていることである。そして、諸階級は自己の階級的本性を議会でのおしゃべり、空文句、連帯、決議一般においてではなく、政治闘争のなかで具体的事実と大衆の行動とによつて明確にしつつある。

これまで支配的であつた、議会制民主主義の下での階級闘争の合法的・平和的発展は終りをとげ、諸階級の階級的立場と政治的分岐が増々鮮明になり、日帝の「上からの内乱」反革命攻撃の激化とともに諸階級の行動が政治―治安問題化し、文字通り、階級対階級、抑圧対被抑圧、差別対被差別の亀裂が大規模に進展し、革命対反革命の闘いが最高度の緊迫状態に達しつつある。

七〇年代において、特に、決定的となつたプロレタリア諸階級の政治的分化の永続的過程は国家形態のボナパ的転換を促進させる階級的基盤へと成熟し、日本階級闘争の内乱的・武装的発展を全人民的規模へと爆発させ、史上、二度目の国内階級激突戦―階級決戦への発展を準備していくのである。

二〇年にも及ばんとする革命的左翼はプロレタリア人民の最先頭にたつて、歴史的闘いを一貫して担い、七〇年安保―沖縄闘争の全人民的な高揚を頂点とする日本階級闘争の革命的転換を切り拓き、プロレタリア、学生の最も先進的部分を日帝打倒の革命闘争へ結集させ、「自国帝国主義打倒―安保粉砕―沖縄解放」の戦略的任務を闘う人民の共通のスローガンとした。

第五の特徴は、革命的内乱―蜂起―内戦の総路線で武装した、革命の最も主体的要素である革命党建設―革命勢力構築の確固たる前進を獲ち取り、革命運動の政治闘争・武装闘争・ゼネスト・マッセンスト等の実践的飛躍と全人民的発展を着実につくりだしていることである。そして又、七〇年代、日帝の侵略反革命、他民族支配の強化、差別分断・抑圧攻撃に対する、被抑圧人民―被差別大衆の政治的決起に連帯し、糾弾を受けとめ、帝国主義的抑圧民族―差別者としての「血債」を自覚し、自らの帝国主義的腐敗・堕落を自己批判し、真のプロレタリア国際主義と階級性を打ち固めていくことが、七〇年代中期戦略的反攻を戦取するための不可欠の課題として問われているのである。

七〇年代中期、現情勢における諸特徴は日本階級闘争が合法的段階から革命的段階へと進展し、労働者階級被抑圧人民のあらゆる戦線での闘いが常態化し、革命的激動へ向かわんとしている。

日帝打倒をめざすプロレタリア人民のあらゆる闘いを統一し、指導しえる革命党―革命勢力の飛躍的前進が増々必要とされている。

闘うアジア人民と連帯し、日帝の侵略反革命―「上からの内乱」反革命攻撃を国内階級激突戦の勝利へと高め、革命的内乱―蜂起に向けた一切の準備を推し進めていくこと、これこそ、われわれに要求されている決定的課題である。

われわれは、七〇年代の基本的特徴がレーニンの「主観的革命情勢」への急速な煮つまりを開始し、階級決戦へと不可避的に発展する階級激突の始まりと規定しえるのである。

第三章　75春闘における革命的労働者の任務

七五年をもつて二〇年目に突入する春闘は歴史的一大転換を迎え、階級激突の一大焦点にならんとしている。

日帝の侵略反革命―「上からの内乱」反革命攻撃の本格的開始は、プロレタリア諸階層を好むと好まざるとにかかわらず、階級対立、革命的激動に投げ込み、労働運動の全国的爆発を生み出している。

七〇年代、労働運動の歴史的高揚は二・一ゼネストを上まわる程の労働者大衆を階級闘争へと結集させ、その高揚と全人民的規模への発展のなかで、労働者階級の政治的・階級的分化―三大潮流への分岐を鮮明にしつつある。

それは第一に、七〇年代労働運動の戦闘的高揚を「日帝打倒―プロ独政府樹立」の基本

戦略で武装し、階級激突戦へと前進させ、革命的内乱―蜂起へと発展させる革命的潮流であり、第二に、日帝の侵略反革命の尖兵、反共突撃隊として、反共―帝国主義労働運動をつくり出し、自らの小ブル的展望を見出している同盟・JCの反共・反革命的潮流であり、第三に、日帝の攻撃に完全に屈服し、侵略反革命下の国内階級平和を積極的につくり出し階級闘争の内乱的発展を回避・鎮静化せんとする社共、民同の社会排外主義潮流である。

日帝の侵略反革命に総対決する革命的潮流は七〇年安保―沖縄闘争、一連の政治闘争と武装闘争の発展過程において、闘う反戦派労働者とガッチリと結合し、日本階級闘争の内乱的・武装的発展の最も革命的翼として存在し、労働者階級の公然たる政治闘争への決起、労働運動の内乱的発展の画期的地平をつくり出した。

そして、社共、総評・民同は日帝の総攻撃、国家的統制に従い、インフレ、スタグフレーション下の国民春闘などという排外主義的アドバルーンを掲げ帝国主義労働運動、JC型の労資協調へとぴつたりと接近し始め、国家形態のボナパ的転換を準備し、その一六「左」翼的支柱へと変質を遂げつつある。

われわれには七〇年代階級闘争の内乱的・武装的発展をかちとり、激烈に進行するプロレタリア階級の戦闘化、階級的分岐を革命的に促進させ、一つ一つの階級的激突に勝利する偉大な任務が課されている事を肝に命じ、そのために、七五春闘こそ、日帝に総対決し反共排外主義、社会排外主義との闘いに勝利する全国的・全人民的爆発を獲ち取り、革命的内乱の一大突破口へと高めあげねばならないのである。

70年代革命的発展と73・74春闘の教訓

日本革命の勝利にとつて、春闘が階級激突へと転換することは決定的意義をもつている。

戦後革命、階級的激突戦の内乱的発展は革命の基本戦略―戦略的総路線を放棄した日本共産党の手によつて総破産し、革命的内乱に決起した人民は分断され、産別会議は解体しプロレタリアートは一切の政治的権利を奪われた。米帝―GHQの占領下で、中国・朝鮮民族解放―革命戦争の前進に恐怖した日米支配階級は、日本資本主義の復興をドッチ・ライン、企業整備をもつて急速に計り、反共分子をテコとしたレッド・パージ攻撃で民主的労働運動を組織した。労働者人民の労闘スト等の幾多の反撃にもかかわらず敗北し、かくして、日帝の再建を許し、ブルジョア独裁の下の政治支配体制と帝国主義的発展を促進させる春闘が開始され定着していつた。

議会主義路線―「大幅賃上げ」を主軸とする社共―民同は日帝の良きパートナーとして、その政治的反動―経済的攻撃に対決する労働者人民の闘いを敗北させ、一貫して改良主義へと歪曲させた。とりわけ、六〇年安保・三池闘争の敗北は、民間部門において、政府―資本家階級の直接的労働者支配へと進み、労資協調、企業防衛・国益・国防を柱とする帝国主義的労働運動を促進させ、更に、六五年日「韓」闘争と四・一七ゼネストの中途挫折をもつてその最頂点に達した。

日帝の侵略反革命政策に総対決する革命的左翼―反戦派労働者の闘いは六〇年代後期日本階級闘争の革命的転換を準備し、七〇年代階級闘争の革命的高揚をつくり出し、他方、社共―民同は労働者人民の政治的・組織的影響力を圧倒的に後退させ、春闘はJCのヘゲモニーの下で展開され、労働運動の右傾化をもたらした。

六〇年代後期において、春闘は大多数の労働者の爆発的エネルギーをその底流にひめつつ、社共―民同による伝統的パターンを喪失し、すでに、「賃上げ」をもつて労働者人民を「賃金奴隷制」へとつなぎとめる安全弁としての役割を失い始めた。

日本における、春闘の開始―定着―崩壊的危機という過程は革命の敗北―革命闘争の合法的封じ込め―革命的激動の始まり、を意味している。

労働者階級は七〇年代春闘を、階級激突戦へ高め、革命的内乱に転化するか、社共―民同の下で、侵略反革命―ボナパ体制への階級平和として収拾されるか、それとも、同盟―JCの下で、侵略反革命の尖兵、反共突撃隊へと再編されるのか、いずれかの階級的選択をとわれざるをえないのである。

戦後世界経済の崩壊的危機の一挙的進行と日帝の経済的攻撃のなかで、七〇年代春闘は七三、七四春闘に見られる如く膨大な労働者人民の戦闘化、政治的流動化を生み出し、プロレタリアートとブルジョアジーとの階級協調の手段から一大階級激突への転換に向かいはじめている。

労働者階級人民は七〇年安保―七二年沖縄闘争を闘い抜き、日本階級闘争の革命的高揚と転換をつくり出し、七三、七四春闘の爆発的高揚を生み出した。

われわれは七三、七四春闘を通じ、その革命的意義として、次の諸点を踏まえねばならない。

まず、第一に、資本家階級と労働者階級の階級的対立の深化・発展が一層明らかになり、激突的様相を呈し、とりわけ、労働者人民がゼネスト、デモ、バリケード占拠等の非妥協的闘いによつて、日帝・資本家に対抗し始めたことである。

国労・動労・都市交通等運輸部門を先頭にする全逓、全電通、自治労、日教組等官公労戦闘的労働者のゼネストの貫徹、民間中小未組織工場労働者を先頭とするストライキ、職場―工場占拠、右翼・ガードマンとの実力対決、永続的武装的闘い―これらの戦闘的労働者によるゼネスト、武装的闘いは社共―民同の「整然たるゼネスト」「闘争回避」策動・統制をうち破り、そして、社共「ものとり」春闘、「JC」春闘の破産を闘いの爆発をもつて実践的に明らかにするに致り、七〇年代春闘の革命的転換に向けた画期的地平をつくり出した。

第二に、ゼネスト・膨大な労働争議に示される労働者階級人民の闘いは日帝の経済的攻撃に対する闘いに限定されることなく、政治的攻撃に対する反撃、「スト権奪還―帝国主義政府打倒」を主要な課題として、自らの目標を鮮明に打ち出したことである。

すべての労働者人民は春闘の結果に満足せず、民同ダラ官指導部の帝国主義政府とのボス交・屈服を否定し、「政党支持の自由」を主要なスローガンとし、「スト権奪還・民主連合政府樹立」を欺瞞的に語り、組合分裂を強行する日共の反革命を具体的事実と闘いによつて明らかにしている。

第三に、日帝の「上からの内乱」反革命攻撃に対決するプロレタリア階級人民のあらゆる戦線での闘いと反撃が諸階級の政治的・武装的発展へと高められ、全人民的規模の政治的闘いへと発展しつつあることである。

日帝の在日中朝人民、沖縄人、部落民、「障害者」、「被爆者」、女性に対する民族的政治弾圧、差別排外主義攻撃と「切り捨て」、「見捨て」政策は激化し、貧農・漁民の失業、半失業状態への落し込め、労働者階級の大多数をしめる中小未組織労働者、臨時工、社外工への帝国主義的矛盾の集中的転化・生活破壊は増々促進されている。

労働者階級人民の未曾有の政治的経済的状態は日帝に対する全人民の憤激の高まりへと転化され、諸階級総体の政治的分解と政治的自覚を促進させ、諸階級のあらゆる戦線での突出した闘いは全人民的闘いへと高揚し始め、とりわけ、朝鮮人民決起連帯、沖縄解放闘争、部落解放闘争、三里塚―高浜入闘争の全人民的発展と労働者階級の政治的・武装的決起がかちとられつつある。

第四に、社共―民同の「国民春闘」のJC型「労資協調春闘」への転落が一層鮮明になり、日帝の侵略反革命の「域内平和」への繰り込みを開始しはじめ、それぞれの〃政権構想〃の反階級的本質を全人民の前に明らかにしつつあることである。

従来、「ヨーロッパ並賃金を！」なるアドバルーンを掲げ、組織労働者の要求を経済主義的・本工主義的に歪曲し、中小未組織労働者に犠牲を強いてきた既成指導部は日帝の政治的経済的攻撃の激化のなかで「国民春闘の向上を！」なる空文句へと再び転換をはかり、その経済主義・差別排外主義を深めている。

それは労資協調へと突き進み、労働者人民の政治上、経済上の完全なる無権利状態へと転落させ、差別・貧困・階層間の格差を拡大させ、日帝の朝鮮植民地化攻撃を排外主義的に容認し、その帝国主義的利潤の分け前をあずからんとする、きわめて悪質な帝国主義的反革命的路線であり、同盟―JCとの融合以外の何ものでもない。しかも、労働者階級の日帝・資本家に対する闘いの永続的発展は社共、同盟・JC、右翼反革命・ガードマンとの実力対決、武装的対決を常態化させ、かかる部分が明確に反革命的敵対物として登場してきているのである。

第四に、七三、七四春闘における闘いは労働者階級人民が革命的激動に向けて着実に進んでいることを示している。

労働者階級人民は社共・民同、同盟・JCの組合主義的統制、反革命的策動にもかかわらず、日帝の政治的弾圧に屈することなく、政治闘争への取り組みを開始し、帝国主義的抑圧民族としての「血債」を自覚し、被抑圧人民、被差別大衆との全人民的闘いへと発展させ、その闘う能力を発揮し、その革命的精神を発揮しつつある。

労働者階級人民は日本階級闘争の革命的転換を押しはかる主体として、安保粉砕―帝国主義政府打倒に向け、革命派との結合を克ちとり、とりわけ中小未組織労働者の地区・職場拠点スト・マッセンストと呼応するゼネラル・ストライキを政治ゼネストとして飛躍させ、総結集することを要求し、「上からの内乱」―反革命攻撃、右翼反革命との武装対時による革命的内乱・蜂起・内戦を準備し克ちとるのか、その事を今や解放への展望として要求しているのだ。

我々は七〇年代初期に切り拓いた日本階級闘争の革命的転換を更に推しはかり、七三、七四春闘にみられるゼネストの爆発的高揚と中小未組織労働者の死活を賭けた永続的・武装的発展を更に拡大し、七〇年代中期戦略的反攻を克ち取り、七〇年代春闘を「革命と反革命」の階級激突へと転換させていかねばならない。

それは七五年階級闘争、七五春闘に課された決定的任務である。

75年春闘の課題と政治的任務

我々は七五年階級闘争、七五春闘を闘うにあたつて、とりわけ、労働者階級が春闘を七五年春期の革命的高揚へと高めるために、まず第一の基本的任務として、日帝打倒の戦略的総反攻に向けた戦略上、政治上の課題を、第二に、七五年階級闘争に問われる政治的課題を明確にしておくことが必要である。

革命的労働者は第一の基本的任務として、七五春闘の全過程を通じ、日帝打倒の戦略的総反攻に向けた階級闘争の戦略的前進、政治的・内乱的発展を総力をあげて闘いとつていくことである。

七〇年代中期階級闘争、労働者階級人民の戦闘的前進のなかで、われわれに問われる戦略上・政治上の任務は、第一に、革命の基本戦略―戦略的総路線で厳格に武装し、第二に内乱―蜂起の実践的準備に着手すること、第三に、プロレタリア人民のあらゆる闘いの先頭に立ち、闘いを統一し、指導しえる革命党―革命勢力へと打ち固めることである。

七〇年代における帝国主義世界再分割戦の激化は全世界いたるところで政治的・経済的矛盾を爆発させ、国際的階級危機を成熟させている。とりわけ、帝国主義の後進国・植民地支配体制は民族解放―革命戦争の歴史的前進によつて解体的危機へと向かい、闘う武装した被抑圧人民はすでに戦略的総反攻戦へとその闘いを進め、国際階級闘争の未曾有の高揚をつくり出している。

植民地被抑圧人民の民族解放の勝利とその革命的発展は帝国主義国プロレタリア人民の国際反革命同盟粉砕・自国帝国主義打倒という戦略上の任務の完遂と不可分の、国際主義で結ばれていることをさし示した。

「日帝打倒―プロ独政府樹立」「沖縄解放―安保粉砕―日帝打倒―米帝放逐」「朝鮮植民地化阻止―日帝・朴体制打倒―南北革命統一」「闘うアジア人民と連帯し、日帝のアジア侵略反革命を攻撃的国内階級激突戦へ転化せよ」の基本戦略―戦略的総路線の正しさが七五年内外情勢の煮つまりと共に一層鮮明になり、これによる徹底した武装を克ち取る事抜きには、日本階級闘争の戦略的前進が一歩もありえないのである。

七〇年代、労働者階級人民の政治的・武装的決起、官公労―民間組織プロレタリアートの経済ゼネストの政治的高揚、中小未組織労働者による労働争議の永続的発展、被差別大衆の徹底糾弾・生活権奪還の前進―かかる人民の闘いは革命闘争の戦略・戦術上の不可欠の課題である内乱―蜂起の準備、実践的着手の必要性を増々現実のものとしている。

即ち、われわれは七〇年代革命的高揚のなかに、①プロレタリア人民の闘いが日帝・資本家との政治的・武装的対決へと進んでおり、国内階級激突戦へと不可避に発展せざるをえないこと、②日帝の「上からの内乱」反革命攻撃、右翼反革命―暴力ガードマンの反革命武装に対決する革命党の武装の着手、全人民武装の促進が闘いの前進にとつての不可欠の要素となつていること、③労働者階級を実体的基礎にあらゆる被差別・被抑圧人民に立脚した革命党の建設とともに、日帝打倒の革命勢力の構築、革命的労働者階級人民を中軸とする反帝統一戦線―労農階級同盟の建設をおし進めること、④革命闘争の戦略的拠点として、工場、生産点、地区、職場を革命勢力の全力量をかけて建設し、防衛し、発展させること、⑤警察・官僚・自衛隊を基礎とする日帝の暴力的独裁体制に決定的打撃を与える政治闘争・武装闘争・叛軍闘争の全人民的高揚を実現し、と同時に、労働者階級人民の革命的内乱―蜂起の階級決戦へと発展するストライキ、ゼネスト、マッセンストを結合させ、政治ゼネストを貫徹すること、かかる戦略上、政治上の任務を克ちとつていかねばならないのである。

次に、われわれは七五春闘、七五年階級闘争の政治上・経済上の諸課題と任務を最先頭に立つて貫徹するなかでこれらの戦略上、政治上の任務を実現していかねばならない、ということである。

まず、第一の課題は、七〇年代中期戦略的反攻の一切を賭けて、天皇の訪沖・訪米阻止闘争に絶対勝利することである。すべての革命的労働者人民は天皇の訪沖・訪米阻止を七〇年安保―七二年沖縄決戦にも比すべき、否、それ以上の政治闘争へと高め、全人民的爆発を克ちとつていかねばならない。

日帝は天皇の政治過程への登場を侵略反革命、「上からの内乱」反革命攻撃、差別排外主義攻撃の最大の武器として積極的におしすすめてきた。それは日帝が侵略反革命を強行すればする程、闘うプロレタリア・被抑圧人民の総反撃に直面し、階級的危機を激発させ、その政治支配体制の危機を暴露し、階級支配の危機をボナパ的国家形態への転換と天皇制―天皇制イデオロギー攻撃をもつて乗り切らんとしていることの証左なのである。

日帝は天皇制―天皇制イデオロギー攻撃をもつて、侵略反革命の野望を隠蔽し、国内階級闘争の鎮静化を計らんとしており、安保再編・沖縄の反革命統合の総仕上げのために、アジア反革命盟主への飛躍と他民族抑圧、国内階級支配の要として天皇の訪沖・訪米を目論んでいるのである。

これこそ、日帝の侵略反革命が新たな段階に突入せんとする決定的メルクマールであり、闘う労働者階級人民は一切の力をかけて総反撃を開始し、天皇の訪沖・訪米阻止闘争を日帝打倒の新たな突破口へと爆発させていかねばならない。

第二の課題は、海洋博粉砕、狭山・三里塚入管闘争、諸政治闘争の政治的・武装的発展を堅持し、飛躍させ、日本階級闘争の戦略的前進をかけて闘い抜くことである。

第三の課題は、在日中朝人民、沖縄人、部落民、「障害者」、「被爆者」、女性をはじめとした被抑圧人民、被差別大衆の闘いへの決起に連帯し告発・糾弾を断乎として受けとめ、日常的な支持・連帯の闘いを「血債」にかけ推し進めることである。

日帝の在日中朝人民に対する差別・分断・同化・抹殺攻撃、沖縄人に対する海洋博攻撃は日に日に強化され、日帝―寺尾は石川一雄青年を先頭とする部落解放同盟の狭山差別裁判糾弾闘争に公然と敵対し、十・三一「無期懲役」という差別・死刑攻撃を加えた。われわれはかかる日帝の攻撃を許し、粉砕しえない弱さを徹底して自己批判し、全力をかけて反撃を準備していかなければならない。

第四の課題は、七五春闘をめぐる労働運動における政治的・経済的諸課題、帝国主義政府打倒・スト権実力奪還、反レパ・マル生粉砕、反合、首切り粉砕、大幅賃上げ、二組解体、右翼ガードマン粉砕をかかげ、社共―民同、同盟―JCによる組合統制・反革命策動との闘いをもつて克ちとつていくことである。

日帝・ブルジョアジーの七五春闘に対する政治的攻撃・差別分断、経済的攻撃は戦後最大の規模へ達するいきおいである。

日帝・ブルジョアジーは経済危機のなかで、破産した高度成長から低成長時代に照応した安定成長への路線転換を呼号し、総需要抑制をテコとしつつ、労働者人民に対する全面的攻撃を強行している。

安定成長という名の日帝の展望は七五春期の爆発的高揚をもつて、革命的に破産におとし込まねばならないのであるが、その展望は、まず第一に、高度成長過程での生産力、過剰資本、等を、①寡占的蓄積体制への暴力的強行、②五一年以降の五次防などを通じた軍需産業の強化、産軍複合体への転換、③朴反共軍事独裁政権への日「韓」経済協力等の援助を通じた植民地（従属）支配体制の確立、を急速におし進めることによつて解決せんとしていることを明確にしておかねばならない。

第二に、石油危機、インフレ対策を口実とした「総需要抑制」による金融引締め策、減産体制、「省資源、省エネルギー、省力化」（新三S運動）、合理化、行政・企業整理、所得政策・新価格体系の導入、等の諸攻撃は①中小企業の倒産、②臨時工・未組織労働者の大量首切り、③本工部分への一時帰休・希望退職・出向の首切り、④人員整理・人べらし、残業カット、求人削減・労働強化、コスト切り下げ、⑤失業者の膨大な発生（百万、潜在失業者二百万程）、⑥賃金カット・賃金抑制、等の労働者階級人民への矛盾の転化によつてのみ暴力的、強権的に貫徹され、更に、⑦反共労働組合官僚の経営参加、⑧官公労労働者に対する政治弾圧・思想攻撃、⑨社共―民同の同盟、JCへの分裂・解体、反共戦線統一の反革命策動、等の攻撃と一体化させ、おし進めんとしているのだ。

日帝の攻撃の前に、社共―民同はすでに屈服し、同盟―JCは「賃金自粛」を唱え、こぞって、侵略反革命の尖兵の道を開始した。

われわれは、七〇年代中期戦略的反攻の勝利に向け、七五春闘を社共―民同による「国民春闘」―JC春闘への組み込みと統一地方選への議会主義的歪曲を断じて許すことなく、七三、七四春闘において発揮された交通労働者を軸としたゼネスト、中小未組織労働者の闘いの永続的・武装的発展、被抑圧人民・被差別大衆の決起を革命的に結合させ、「スト権実力奪還」、処分・レッド・パージ粉砕、合理化実力粉砕を突破口に政治ゼネストへと高めきり、「帝国主義政府打倒―プロ独樹立」「闘うアジア人民と連帯し、日帝の侵略反革命を攻撃的国内階級激突戦へ転化せよ」の基本戦略―戦略的総路線の下、天皇の訪沖・訪米阻止、政治闘争への武装決起を克ちとらねばならない。